書頭國文提要

全

202
427

202-427
1200800036582

帝國圖書館藏

永井一孝編

國文提要

大日本圖書株式會社發兌

大正
5. 4. 13
內交

凡例

本書は中學校・師範學校・及び高等女學校卒業生の補習科用として編纂したるものなり。故に、また、其等の學校の最上級生が、一定の國文教科書を講了したる場合に於いて用ふるに適し、また、小學教員の講習會用の教科書たるにも、高等豫備校の教科書たるにも適すべし。

本書は成るべく中等國文教科書に收めたる文章を收錄することを避けたり。されども、或は稀に重出したるものも無きにあらじ。それらは教師の手心によりて省くも可なるべく、解釋說明の程度を進めて反覆するも可なるべし。

本書は附錄として設問を掲げたり。その中には、文法・假名遣・の

練習もあり、漢字の讀方並に意義を問ふもあり、充字もあり、正誤もあり。期するところは、世人の往々にして誤ることある文字もしくは文法・假名遣・等をあげて、之を矯正せむとするにあり。充字には同音異義の文字もまゝあるべしと雖も、意義の通ずるかぎりは、何れを採るも可なり。

本書は國文逢原・國文關鍵・の姉妹篇三篇より成る。されども、一を講了せざれば他を講習することの能はざる程の關係あるものにあらず、唯目的體裁を同じうするのみにて、固より單獨に之を採用するを妨げず、また、何れを先に採用せむも妨ぐるものにあらず。

大正五年三月

編纂者識

頭書 **國文提要** 目次

一　山嶽の美觀……一頁
二　高倉院の御仁德……七
三　韓昌黎……一四
四　福原の新都……一九
五　待賢門の戰……二三
六　後醍醐天皇の御治世……三〇
七　末葉のやどり……三六
八　閑居の氣味……四三

九　雜感　五章……四七
一　和歌……四七
二　飛鳥川の淵瀨……四九
三　過ぎにし方……五一
四　大事を思ひたゝむ人……五二
五　竹林院入道……五三
一〇　四季のあはれ……五五
一一　花はさかりに……六〇
一二　秋雨……六六
一三　雪中の眺望……七〇
一四　玉づさ四篇……七三

一　小澤蘆庵主のもとに……七三
二　人のもとより氷をおくれるに……七四
三　月の夜友のもとに……七六
四　雪の朝友のもとに……七七
一五　月は世々の形見……八〇
一六　壬子試筆の詞……八七
一七　裾野の旅……九一
一八　水無瀨殿　其一……九九
一九　水無瀨殿　其二……一〇六
二〇　大原御幸　其一……一一二
二一　大原御幸　其二……一一七

二二　大原御幸　其三……一二三
二三　公家一統の政　其一……一三三
二四　公家一統の政　其二……一四〇
二五　菅公の左遷……一四六

（目次終）

頭書國文提要

一　山嶽の美觀

無垢　藍靛色　縹渺　凝黛堆藍　絢煥す　藕絲　澎湃　大造す
風餐雨虐　悍然勇往　蒼翠秀潤　長揖　閲然　變幻

紅白玄黄青緑は、平面世界に在りと雖も、尋常にこれを認め得べし。花の紅なる、月の白き、雲の玄なる、沙の黄なる、水の青き、木の緑なる、何れの處よりか認め難からむ。然れども、天地間の純粹無垢なる紫色・藍靛色は、山を仰望するにあらずんば、竟に觀るべからず。想ふに、山の紫色・藍靛色・

は、細緻鮮麗に、光澤燦然として、特に一雨洗ふが如く、新霽水に似たり。この際に縹渺たる凝黛堆藍は、染具を以てかくの如く調合せむとすとも、凡庸の頭腦を以て到底成し得べからず。大地の彩色は、山を得て始めて絢煥すといふべし。

唐人、巖を雲根と呼べり。趣あるかな、この稱や。雲、山より起り、山、雲を得て愈〻美に、益〻奇に、層一層に大を添ふ。若しそれ、雲、縷々として藕絲の如く、山の背腹を曳くや、宛として神女の羅裳に似、朝暾夕陽會〻これと映發して純紅なること火の如く、羅裳桃花色に染めなさる。倏忽にして雲來往し、迅速に澎湃として天を捲き、百道狂馳、山、その間より、或

雲根　移レ石動ニ雲根一——賈島の詩句

は湧き、或は沒し、或は浮び、或は沈み、汎々として大海上の島嶼と化成す。頃刻にして空氣の運動靜穩となるや、雲は漸く下降して山腹に繚繞し、その上より、絕頂の峭然として孤尊なるを觀る。要するに、山、雲を得、雲、山を待ちて、相互に愈〻美に、益〻奇に、層一層に大を映發す。

水、山に在りて、愈〻美に、益〻奇を成す。平面世界に在りて看得べからざるその現象も、山にては能く認め得らるべし。水の最も晶明なるもの、最も平和なるもの、最も藍靛なるものは、山中の湖之を代表し、水の最も激烈なるものは、山陰の瀑布之を代表し、水の最も清洌なるもの、最も可憐なるものは、山間の溪水之を代表す。凡そ水の睡り・怒り・笑ふ・

狀貌は、山に入らずんば竟に觀るべからず。加之、巖は水を承けて綠潤となり、水に齧まれて奇態怪狀を呈出す。水の美・水の奇・は、山を得て茲に大造し、巖の美・巖の奇・は、水を待ちて始めて完成す。

平面世界に在る花木は、自ら平面世界の感化を受け、かつ人間に成長するを以て、これが爲に豪健磊落ならず。畢竟、艶を競ひ、媚を呈するもの、往々然り。山中に在る花木に至りては然らず、自然の儘に成長して、人間外に不羈獨立するが上に、時に風餐雨虐、或は土壤を剝がれ、或は巖石に壓抑せられて、悍然勇往、層一層に不羈獨立の素養を助長し來る。要するに、山中の花木は豪健なり、磊落なり、氣骨あり。況や、花は山に開きて愈〻鮮に、木は山に長じて益〻蒼翠秀潤を添ふ。花木の妙所を大悟せむと欲せば、山に入らずんば竟に得べからず。

樓に登りて下瞰するも、猶且街上來往の人を藐視するの概あり、東京愛宕山に登りて四望するもの、なほ且廣遠の氣象胸中より勃發するを覺ゆ。何ぞ況や、嵯峨として天に接せる高山を登るをや。山に彩色絢煥あり、雲の美・雲の奇・雲の大・あり、水の美・水の奇・あり、花木の豪健磊落あり。萬象の變幻や、かくの如く山を得て大造し、山を待ちて映發するのみならず。その最絶頂に登りて下瞰せば、雲煙脚底に起り、平面世界の形勢は、吾に向ひて長揖し來り、悉くこ

れを掌上に弄し得べきなり。吾こゝに到りて人間の物にあらず、宛然天上に在るが如く、若しくは地球以外の惑星より眺觀するに似て、眞箇に胸宇を宏恢にし、意氣を高邁ならしむべし。加ふるに、山の組織の壯絶なるを頓悟し、山の形體の完美なるを大覺し、漫に大氣の清新にして洗ふが如き處に長嘯し、かねて四面の闃然寂靜なる裡に潛思默想せば、我頭腦は神となり、聖となり、おのづから靈慧の煥發するを知るべし。況や、山に登ること愈〻高ければ愈〻困難に、益〻登れば益〻危險に、愈〻益〻萬象の變幻に逢遭し、愈〻益〻快樂の度の加倍するに至るべきをや。

之を要するに、山は自然界の最も興味あるもの、最も豪

惑星　太陽の周圍に橢圓狀の軌道を畫いて運行する天體、一に遊星ともいふ

健なるもの、最も高潔なるもの、最も神聖なるもの、登山の氣風興作せざるべからず。（志賀重昂）

設問一　讀方並に意義。

首途　傳く　滂沱　卸す　阿る　鋏　固唾　帷子　肯ず　厖大　庇ふ

設問二　左の文に文法及び假名遣の誤あらば正せ。

一　嵐に吹かして折るまゝに折れさしたり。

二　忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかな。

三　文治元年四月、二の階をのぼりしも、八島のおとゞ宗盛を生どりの賞と聞ゆ。

二　高倉院の御仁德

むげに　ひねもす　野分　伴の造　いとゞし　雞人　上臥　上日

延喜・天暦の帝
醍醐帝と村上帝

北の陣
禁中の北門なる朔平門のこと、また縫殿の陣ともいふ

高倉院御在世の御時、人の順ひ附き奉ることは、恐らくは延喜・天暦・の帝と申すとも、これにはいかでまさらせ給ふべきとぞ、人申しける。おほかたは、賢王の名を揚げ、仁德の行を施させおはしますことも、君御成人の後、清濁を分たせ給ひての上の御事にてこそあるに、この君はむげに幼主の御時より、性を柔和に受けさせ給へり。

去んぬる承安のころほひ、御即位の始つ方、御年十歳ばかりにもやならせ給ひけむ、あまりに紅葉を愛せさせ給ひて、北の陣に小山を築かせ、櫨・楓・のまことに色美しうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて、ひねもすに叡覽あるに、なほ飽き足らせ給はず。然るを、ある夜野分はしたなう吹いて、紅葉を吹き散し、落葉頗る狼藉なり。殿守の伴の造、朝ぎよめすとて、これを悉く掃き捨ててけり。殘れる枝・散れる木の葉・をばかき集めて、風すさまじかりける朝なれば、縫殿の陣にて、酒煖めてたべける薪にこそしてんげれ。

藏人
官名、禁中に奉仕して禁中一切の事を總掌す

奉行の藏人、行幸より先にと、急ぎ行きて見るに、あと形なし。「いかに。」と問へば、「しかじか。」と答ふ。「あなあさまし。さしも君の執しおぼしめされつる紅葉を、かやうにしつることよ。知らず、汝等禁獄流罪にも及び、わが身も如何なる逆鱗にかあづからむずらむ。」と、思はじ事なう案じ續けてゐたる所に、主上、いとゞしく、夜のおとゞを出でさせもあへ

林閒に
林閒煖レ酒燒二紅葉一。—白樂天の詩句

雞人曉を
雞人唱レ曉聲驚二明王之眠一。—和漢朗詠集に出づ、都良香の詩句

ず、かしこへ行幸なつて、紅葉を叡覽あるに、無かりければ、「いかに。」と御尋ありけり。藏人、何と奏すべき方もなし。ありのまゝに奏聞す。天氣殊に御心よげにうち笑ませ給ひて、『林閒に酒を煖めて紅葉を燒く。』といふ詩の意をば、されば、それらには誰が敎へけるぞや。やさしうも仕つたるものかな。」とて、却て叡感にあづかりし上は、敢て勅勘なかりけり。

また安元のころほひ、御方違の行幸ありしに、さらでだに、雞人曉を唱ふる聲、明王の眠を驚すほどにもなりしかば、いつも御寢覺めがちにて、つやつや御寢もなかりけり。況や沍ゆる霜夜の烈しきには、延喜の聖代、國土の民ども

殿上人
四位五位の內にて昇殿を許されたるもの及び藏人の職にあるもの

如何に寒かるらむとて、夜のおとゞにして御衣を脫がせ給ひけることなどまでもおぼしめし出でて、わが帝德の至らぬことをぞ御歎ありける。

やゝ深更に及んで、程遠く人の叫ぶ聲しけり。供奉の人人は聞きもつけられざりけれども、主上は聞こしめして、「たゞ今叫ぶは何ものぞ。あれ見て參れ。」と仰せければ、上臥したる殿上人、上日のものに仰せて尋ぬれば、ある辻に、あやしの女の童の長持の蓋提げたるが、泣くにてぞありける。「いかにぞ。」と問へば、主の女房の御所に侍はせ給ふが、このほど漸うにして仕立てられつる衣を持つて參るほどに、たゞ今男の二三人詣うで來て、奪ひ取つて罷りぬるぞ

や今は御裝束があらばこそ、御所にも侍はせ給はめ。又はかばかしう立ち宿らせ給ふべき親しい御方もましまさず、これを思ひつゞくるに、泣くなり。」とぞ申しける。

さて、かの女の童を具して參り、この由奏聞したりければ、主上聞こしめして、「あな無慚や。如何なるもののしわざにてかあるらむ。」とて、龍顏より御涙を流させ給ひ、「堯の代の民は、堯の心のすなほなるを以て心とする故に、みなすなほなり。今の代の民は、朕が心を以て心とする故に、かたましきもの朝にあつて罪を犯す。これわが恥にあらずや。」とぞ仰せける。「さるにても、取られつらむ衣は何色ぞ。」と御尋ねあれば、しかじかの色と奏す。建禮門院の未だ中宮に

建禮門院 御名は德子。

平清盛の女にて、高倉帝の中宮

ておはしましける時なり。その御方へ、「さやうの色したる御衣や候ふ。」と仰せければ、先のよりは遙に色うつくしきが參つたるを、件の女の童にぞ賜はせける。「未だ夜深し。又さる目にもこそ逢へ。」とて、上日のものをつけて、主の女房の局まで送らせましましけるぞかたじけなき。

されば、あやしの賤の男・賤の女に至るまで、たゞこの君千秋萬歲の寶算をぞ祈り奉る。（作者未詳——平家物語）

設問 充字

もんちやく　かせぐ　かんか　かつぱう　かくくわ、さうやう　あぢさい　うつぷん　ゑぐる　ゆめにおそはる　えこひいき

韓昌黎　名は愈、字は退之、昌黎は其號、唐代の文豪にて、憲宗の朝佛骨を論じて貶せらる

杜子美　名は甫、號は少陵、盛唐の詩仙

李太白　名は白、號は青蓮、盛唐の詩仙

三　韓昌黎

猶子　道士の術　逍遙　眞宰　區々　やがて　嬋娟　勃然として

謫居　九重天

韓昌黎は晩唐の季に出でて、文才優長の人なりけり。詩は杜子美・李太白・に肩を雙べ、文章は漢・魏・晉・宋・の間に傑出せり。昌黎が猶子に韓湘といふものあり。これは文字をも嗜まず、詩篇にも携らず、たゞ道士の術を學びて、無爲を業とし、無事を事とす。

ある時、昌黎、韓湘に對ひて申しけるは、「汝天地の間に化生して、仁義の外に逍遙す。これ君子の恥づるところ、小人の專とするところなり。われ常に汝の爲に悲むこと切なり。」と教訓しければ、韓湘大にあざ笑ひて、「仁義は大道の廢れたるところに出で、學教は大僞の起る時に盛なり。われ無爲の境に優遊して、是非の外に自得す。されば眞宰の臂を掣きて壺中に天地を藏し、造化の工を奪ひて橋裏に山川を峙つ。却つて悲むらくは、公の唯古人の糟粕を甘なつて、空しく一生を區々の中に誤ることを。」と答へければ、昌黎重ねて、「汝がいふところ、われ未だ信ぜず。今すなはち造化の工を奪ふことを得てむや。」と問ふに、韓湘答ふることなくして、前に置きたる瑠璃の盆をうちうつぶせて、やがてまた引き仰けたるを見れば、忽に碧玉の牡丹の花の嬋

秦嶺、藍關 共に陝西省鳳翔府の南にある地名

潮州 廣東省潮州府

娟たる一枝あり。昌黎驚きてこれを見るに、花中に金字に書ける一聯の句あり。

雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前。

昌黎不思議の思をなして、これを讀みて一唱三嘆するに、句の優美遠長なる體裁のみありて、その趣向落著の所を知り難し。手に取りてこれを見むとすれば、忽然として消え失せぬ。これよりしてこそ、韓湘仙術の道を得たりとは、天下の人に知られけれ。

その後、昌黎、佛法を破りて儒教を貴むべきよし、奏狀を奉りける咎によりて、潮州へ流さる。日暮、馬泥んで、前途程遠し。遙に故郷の方を觀れば、秦嶺に雲横たはつて、來つらむ方も覺えず。悼みて萬仞の嶮に登らむとすれば、藍關に雪滿ちて行くべき末の路もなし。進退歩を失うて頭を回すところに、いづくより來れるともなく、韓湘勃然として傍にあり。昌黎悅びて馬より下り、韓湘が袖を引きて、涙の中に申しけるは、「先年、碧玉の中に見えたりし一聯の句は、汝われにあらかじめ左遷の愁を告げ知らせたるなり。今また汝こゝに來れり。料り知りぬ、われ遂に謫居に愁死して、歸ることを得じと。再會期なくして、遠別今にあり。豈に悲に堪へむや。」とて、前の一聯に句を續けて、八句一首となして韓湘に與ふ。

一封朝奏九重天。　夕貶潮陽路八千。

欲爲聖明除弊事。　豈將衰朽惜殘年。
雲横秦嶺家何在。　雪擁藍關馬不前。
知汝遠來須有意。　好收吾骨瘴江邊。

韓湘この詩を袖に入れて、泣く泣く東西に別れにけり。

（作者未詳――太平記）

設問一　充字。

けつこう　さうじゆう　けんさつくわん　ゑしやく　ゆがむ　あひにく　いうよ　よゆう

設問二　讀方並に意義、

稜威　蘊奥　捗る　娵　舫ふ　流石　儚む　鍔　搖藍　魍魎　頤を解く

都うつり　攝津國福原の京に遷都したるをいふ

嵯峨天皇云々　嵯峨天皇とあるは誤にて桓武天皇の延曆十三年十月也

四　福原の新都

水無月　ことわり　軒を爭ふ　條里　木の丸殿　せきあへず　ありとしある人　浮雲の思　衣冠布衣　都のてぶり　しるく　限あるみつぎ物

治承四年の水無月のころ、俄に都うつりありき。いと思の外なりし事なり。おほかた、この京の始を聞けば、嵯峨天皇の御時、都と定まりにけるより、後すでに數百歲を經たり。ことなる故なくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人たやすからず愁へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、帝より始め奉り

公卿　攝關三公大中納言參議及び散三位以上の人。上達部に同じ

今の京　福原の京

て、大臣・公卿、悉く攝津國難波の京に移り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰か一人故郷に殘り居らむ。官位に思をかけ、主君の蔭をたのむ程の人は、一日なりとも、とく移らむと勵みあへり。時を失ひ世にあまされて、期する所なきものは、愁へながら留り居たり。軒を爭ひし人のすまひ、日を經つつ荒れ行く。家は毀たれて淀川に浮び、地は目の前に畠となる。人の心皆改まりて、たゞ馬鞍をのみ重くし、牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

その時、おのづから事のたよりありて、攝津國今の京に到れり。處の有樣を見るに、その地程せばくて、條里を割る

かの木の丸殿　天智天皇の造り給ひし筑前朝倉の宮

故郷　京都

に足らず。北は山に傍ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常に喧しく、潮風殊に烈しく、內裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて優なる方もありき。日々に毀ちて、川もせきあへず運び下す家は、いづくに造れるにかあらむ。猶空しき地は多く、造れる家は少し。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、みな浮雲の思をなせり。もとよりこの處に居たる者は地を失ひて愁へ、今移りすむ人は土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車に乘るべきは馬に乘り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都のてぶり忽に改まりて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞き

おけるもしるく、日を經つゝ世の中浮き立ちて、人の心もをさまらず。民の愁つひに空しからざりければ、同年の冬なほこの京にかへり給ひにき。されど、毀ちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにも造らず。ほのかに傳へ聞くに、古の賢き御代には、憐をもて國を治めたまふ。即ち御殿に茅を葺きて軒をだにもとゝのへず、煙のともしきを見たまふ時は、限あるみつぎ物をさへ許されき。これ民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中の有様、昔になずらへて知りぬべし。

（鴨長明――方丈記）

設問 讀方及び意義。

隱慝　優婆塞　衣鉢　靫　怯ゆ　警策　價値　凩　迚　慫慂　適

御殿に茅を云々　唐堯の仁政をいふ

煙のともしき云々　仁德帝の仁政をいふ

旅籠　逸物　所勞　搦手　追手

五　待賢門の戰

腹卷　大床　涯分　切斑の矢　重籐の弓　黄月毛　ゆゝし　弓手　不覺人　僻目

六波羅　京都下京區鴨川の東、七條以北、五條松原通以南

さる程に、六波羅の皇居には公卿僉議あつて、清盛を召されけり。紺の直垂に、黑絲縅の腹卷に左右の籠手をさして、折烏帽子引き立てて、大床にかしこまる。

王事鹽きことなし　王事無レ鹽、不レ遑レ將レ父――詩經小雅

頭中將實國を以て仰せ下されたるは、「王事鹽きこと無ければ、逆臣亡びむこと疑なし。但し、たまたま新造の内裏なり。もし回祿あらば朝家の御大事たるべし。官軍僞りて

回祿

鄭禮二火於回祿一―左傳

范蠡　越王勾踐の臣、吳を滅して越を霸たらしむ、

張良　漢の高祖の謀臣

項羽　楚の王

主上　二條天皇

引き退かば、凶徒定めて進み出でむか。然らば官軍を入れかへて、内裏を守護せさせ、火災なきやうに思慮あるべし。」と仰せ下されければ、清盛畏つて、「朝敵たる上は、逆徒の誅戮は掌の内に候ふ間、時刻を廻らすべからず。然れば、定めて狼藉出來せむか。火失なからむ條こそ、難儀の勅諚にて候へ。さりながら、范蠡が吳國を覆し、張良が項羽を滅ししも、みなこれ智謀の致す所なれば、涯分武略を廻らして、禁闕無異なるやうに成敗仕るべし。」と奏して出でられけり。

主上御座あれば、皇居の御固に清盛を留めらる。大内に向ふ人々には、大將軍は左衞門佐重盛・三河守頼盛・淡路守教盛、侍には筑後守家貞・子息左衞門尉貞能・主馬判官盛國・子息右衞門尉盛俊・與三左衞門尉景安・新藤左衞門家泰・難波次郎經房・瀬尾太郎兼康・伊藤武者景綱・館太郎貞康・同じき十郎貞景・を始として、都合其勢三千餘騎、六波羅をうち出でて、賀茂河を馳せ渡し、西の河原に控へたり。

樊噲　漢の高祖の勇將

左衞門佐重盛は生年二十三、けふの軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨の匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒をしめて、小烏といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黄月毛なる馬に、柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛のたまひけるは、「年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げむこと、何の疑かあるべき。誰かこゝに樊噲・張良・が勇を

なさざらむ。」とて、三千餘騎を三手に分けて、近衞・中御門・大炊御門・大宮表・へうち出でて、陽明・待賢・郁芳門・へ押し寄せたり。

陽明、待賢、郁芳　宮城の東側に在る外門

大内には、三方の門を鎖し固め、表をば開かれたり。承明・建禮・の脇の小門をも俱に開きて、大庭には馬ども多く引き立てたり。梅壺・桐壺・簾壺・紫宸殿の前後・登華殿の脇の壺・まで、兵ひしと竝み居たり。これみな源氏の勢なれば、白旗二十餘流うち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流さし擧げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつとつくりければ、大内も響き渡りて夥し。

承明、建禮　承明門は紫宸殿の正面に、建禮門は其外に在る内門

鬨の聲に驚きて、只今までゆゝしく見えられたる信頼

卿、顏色かはりて草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝ふるひて下りかねたり。人なみなみに馬に乘らむと引き寄せたれども、太りせめたる大の男の、大鎧は著たり、馬は大なり、乘りわづらふ上、主の心にも似ずはやり切つたる逸物なれば、つと出でむ、つと出でむとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、かくやと覺ゆるばかりにて、乘りかね給ふところを、侍二人つと寄つて、「とく召し候へ。」とておし上げたり。あまりにや押したりけむ、弓手の方へ乘り越して、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引き起して見れば、顏に砂ひしとつき、鼻血流れて見苦しかりけり。

穆王八匹の天馬　周の穆王が即位の三十二年に八匹の駿馬を得て天下を巡行せる故事—史記

日華門　春興殿と宜陽殿との間に在る小門

義朝この體を見て、日頃は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「かの信頼といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門をうち出でて、郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血おし拭ひ、とかくして馬にかき乘せられ、待賢門へ向はれけるが、ものの用に合ふべしとも見えざりけり。

左衞門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にておし寄せて、呼ばり給ひけるは、「この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衞門佐重盛、生年二十三。」と名のりかけければ、信頼返事にも及はず、「それ防げ、侍ども。」とて引き退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。われさきにと逃げければ、重盛いよいよ勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。

義朝これを見て、「惡源太はなきか、信頼といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。かの敵追ひ出せ。」とのたまひければ、「承り候ふ。」とて驅けられけり。（作者未詳——平治物語）

設問一　讀方並に意義。

入魂　醇化　庶幾　縟禮　津々　人格　注連　參差　緒餘　尸位　素餐　截斷

設問二　充字。

しゅ、めつれつ　くわんき、しんしゆく　じうまん　しんしよく、じじ　やく　しんしやく　ほうふく、ぜつたう

六　後醍醐天皇の御治世

狼煙　鯢波　八荒　四品　儲王　拜趨の禮　成敗　前烈　曆を翻す　碩才

九十五代　昔は神功皇后を加へ弘文仲恭の二代を數へ奉らざりしも也

濫觴　江始出二于岷山一其源可二以濫レ觴及三其至二江津一也不レ舫レ舟不レ避レ風則下レ可二以涉一一家語

爰に本朝人皇の始、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の御宇に當つて、武臣相摸守平高時といふ者あり。此時、上、君の德に乖き、下、臣の禮を失ふ。これより四海大に亂れて、一日も未だ安からず、狼煙天を翳め、鯢波地を動かす。今に至るまで四十餘年、一人として春秋に富むを得ず、萬民手足を措くに處なし。倩、其濫觴を尋ぬれば、啻に一朝一夕の故にあらず。元曆年中に、鎌倉の右大將賴朝卿、平家を

守護　一國一員にて盜賊を追捕し犯罪を裁斷し大番を督使す後には民政にも關涉せり

地頭　莊園を管掌し租稅課役を徵收し定例の租額を領家に納め盜賊兇徒を守護に交付するなどの事を掌る

追討して其功あるの時、後白河院叡感の餘に、六十六箇國の總追捕使に補せらる。是より武家始めて諸國に守護を立て、庄園に地頭を置く。かの賴朝の長男左衞門督賴家、次男右大臣實朝公、相續いで皆征夷將軍の武將に備る。是を三代將軍と號す。然るを、賴家卿は實朝の爲に討たれ、實朝は賴家の子惡禪師公曉の爲に討たれて、父子三代、僅に四十二年にして盡きぬ。其後、賴朝卿の舅、遠江守平時政の子息、前陸奥守義時、自然に天下の權柄を執り、勢漸く四海を覆はむとす。此時の太上天皇は、後鳥羽院なり。武威下に振ひ、朝憲上に廢れむことを歎き思召して、義時を亡さむとし給ひしに、承久の亂出來て、天下暫くも靜かならず、遂に

旌旗日を掠めて宇治・勢多・にして相戰ふ。其戰未だ一日を終へざるに、官軍忽に敗北せしかば、後鳥羽院は隱岐國に遷されさせ給ひて、義時彌〻八荒を掌に握る。其より後、武藏守泰時、修理亮時氏、武藏守經時、相摸守時賴、左馬權頭時宗、相摸守貞時、相續いで七代、政、武家より出で、德、窮民を撫するに足り、威、萬人の上に被ると雖も、位、四品の際を越えず、謙に居て仁恩を施し、己を責めて禮儀を正す。是を以て、高しと雖も危からず、盈てりと雖も溢れず。

七代 北條氏は時政より高時まで九代也

承久より以來、儲王攝家の間に、理世安民の器に相當り給へる貴族を一人鎌倉へ申し下し奉りて、征夷將軍と仰いで、武臣拜趨の禮を事とす。同じき三年に、始めて洛中に

兩人の一族を据ゑて、兩六波羅と號して、西國の沙汰をとり行はせ、京都の警衞に備へらる。又、永仁元年より、鎭西に一人の探題を下し、九州の成敗を司らしめ、異賊襲來の守を堅うす。されば、一天下普く彼の下知に隨はずといふ者は無かりけり。朝陽犯さざれども、殘星光を奪はるゝ習なれば、必ずしも武家より公家を蔑にし奉るとしもは無けれども、處には地頭强うして領家は弱く、國には守護重うして國司は輕し。この故に、朝廷は年々に衰へ、武家は日々に盛なり。

領家 莊園の所有者、又本所、本主ともいふ

茲に因つて、代々の聖主、遠くは承久の宸襟を休めむが爲、近くは朝儀の陵廢を歎き思召して、東夷を亡さばやと、

常に叡慮を運らされしかども、或は勢微にして叶はず、或は時未だ到らずして默止し給ひける處に、時政九代の後胤、前相摸守平高時入道崇鑑が代に至つて、天地命を革むべき危機此に顯はれたり。

倩古を引いて今を視るに、行跡甚輕くして人の嘲を顧みず、政道正しからずして民の弊を思はず、唯日夜に逸遊を事として、前烈を地下に羞しめ、朝暮に奇物を翫んで、傾廢を生前に致さむとす。衞の懿公が鶴を乘せし樂早盡き、秦の李斯が犬を牽きし恨今に來りなむとす。見る人眉を顰め、聽く人唇を翻す。

懿公云々
懿公鶴を愛して軒に乘す狄衞を伐ちし時兵ども鶴を用ひよといひて命を奉ぜず遂に亡さる

李斯云々

此時の帝、後醍醐天皇と申しし、後宇多院の第二の皇子、談天門院の御腹にて御座せしを、相摸守が計ひとして、御年三十一の時、御位に即け奉る。御在位の間、內には三綱五常の儀を正して、周公・孔子・の道に從ひ、外には萬機百司の政怠り給はず、延喜・天曆・の跡を追はれしかば、四海風を望んで悅び、萬民德に歸して樂む。凡そ諸道の廢れたるを興し、一事の善をも賞せられしかば、寺社禪律の繁昌爰に時を得、顯密儒道の碩才も皆望を達せり。誠に天に受けたる聖主、地に奉ぜる明君なりと、其德を稱し、其化に誇らぬ者は無かりけり。(作者未詳——太平記)

李斯趙高の爲に讒せらるゝに臨み其子李由に謂つて曰く吾汝と共に復黃犬を牽きて俱に上蔡の東門を出で狡兎を逐はんと欲するも得んやと、父子哭して死す

顯密
天台、眞言

設問 文法及び假名遣の正否。

一 今にして斷然之を廢さずむば、後日必ず悔うることあらん。

二　貧しき者は財を以て禮とし、老ひたる者は力を以て禮とする。

三　言に出でてこそ歎き給はざりしかど、心にはいかばかり悲み給ひけむ。

七　末葉のやどり

なずらふ　簀子　閼伽　箏　炭櫃　よすが　あばらなる姫垣　爪木　空蟬の世　口業　裾輪の田井　且は　古人をしのぶ　かせき知れらむ

爰に六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば、狩人の一夜の宿を作り、老いたる蠶のまゆを營むが如し。これを中比の住家になずらふれば、又百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に

中比の住家　大原山の住家をいふ

傾き、住家は折々に狹し。その家の有樣、世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて作らず、土居を組み、うちおほひを葺きて、つぎ目ごとにかけがねをかけたり。もし、心に叶はぬ事あらば、やすく外に移さむが爲なり。その改め造る時、いくばくの煩かある。積む所、僅に二兩なり。車の力を酬ゆる外は、更に用途いらず。

今、日野山の奥に跡をかくして、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、中には、西の垣に添へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を請けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並に不動の像を懸

日野山　山城國宇治郡木幡山の東北にあり

往生要集
書名、源信僧都の撰

けたり。北の障子の上に、小き棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごとき抄物・を入れたり。傍に箏・琵琶・おのおの一張を立つ。所謂をり箏・つぎ琵琶・これなり。東に添へて蕨のほどろをしき、つかなみをしきて、夜の床とす。東の垣に窓をあけて、爰に文机を出せり。枕の方に炭櫃あり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて、園とす。すなはち、もろもろの藥草を栽ゑたり。假の庵の有樣かくの如し。

その處のさまをいはば、南に筧あり、岩を疊みて、水を溜めたり。林の木近ければ、爪木を拾ふに、乏しからず。名を外山といふ。正木のかつら跡を埋めり。谷茂けれど、西は晴れ

跡の白浪
世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波
—滿誓沙彌
潯陽の江

たり。觀念の便、なきにしもあらず。春は、藤波を見る。紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は、時鳥を聞く。語らふごとに、死出の山路を契る。秋は、日ぐらしの聲、耳に滿てり。空蟬の世を悲むかと聞ゆ。冬は、雪を憐む。積り消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし、念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業をさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もし、跡の白波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし、桂の風葉を鳴らす夕には、潯陽の江を思ひやりて、

潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟々―白樂天の琵琶行の詩句
源都督 桂大納言源經信、都督は太宰帥の唐名
秋風、流泉 琵琶の曲名

源都督の流を倣ふ。もし、あまりの興あれば、しばしば松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず、獨り調べ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

又、麓に柴の庵あり、すなはち山守が居る處なり。かしこに小童あり、時々來りて相訪ふ。もし、つれづれなる時は、これを友として遊びありく。かれは十六歳、われは六十路。その齡ことの外なれど、心を慰むる事はこれ同じ。或は茅花をぬき、岩なしを採る。又零餘子をもり、芹をつむ、或は裾輪の田井に到りて、落穗を拾ひて穗組をつくる。もし、日麗かなれば、嶺に攀ぢ登りて、遙に故郷の空を望み、木幡山・伏見

岩間 近江國滋賀郡に在り千手觀音を安置す
石山 同郡に在り藥師ゐ安置す
蟬丸 仁明天皇の頃の人
田上川 宇治川の上流
猿丸太夫 奈良時代の歌人
山鳥の云々 ほろほろと鳴く山鳥の聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ―行基

の里・鳥羽・羽束師・を見る。勝地は主なければ、心を慰むるに障なし。あゆみ煩なく、志遠く到る時は、是より峰つゞき炭山を踰え、笠取を過ぎて、或は岩間に詣で、或は石山を拜む。もしは又、粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡を弔ひ、田上川を渡りて、猿丸太夫が墓を訪ぬ。歸るさには、折につけつゝ櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り、且は家裏にす。もし、夜しづかなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く槇木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峰のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざか

る程を知る。或は埋火をかきおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけて盡くることなし。況や、深く思ひ深く知れらむ人の爲には、これにしも限るべからず。（鴨長明――方丈記）

設問一　充字。

なずらふ　とかく　かけがね　跡をかくす　棚をかまへて　ひぐらしの聲　口業をさめつ　しばしば　あやつる　つれづれ　袖をうるほす　篝火にまがふ

設問二　讀方及び意義。

看經　家苞　行火　晏駕　猶子　異端　紆餘曲折　浦曲　右府　白地　荏苒　陶冶

八　閑居の氣味

絲竹　はごくむ　なすべき事　一期　三界　俗塵に著す　分野

それ、人の友たる者は、富めるを貴み、懇なるを先とす、必ずしも情あるとすなほなるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせむには如かず。人の奴たる者は、賞罰の甚しきを顧み恩の厚きを重くす、更にはごくみあはれぶといへども、やすくしづかなるをば願はず。たゞ我身を奴とするには如かず。もし、なすべき事あれば、すなはちおのづから身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を從へ、人を顧るよりは安し。もし、ありくべきことあれば、みづから歩む。苦しと

いへども、馬鞍牛車と心をなやますには似ず。今、一身を分ちて、二つの用をなす。手の奴、足の乘物、よく我心に適へり。心また身の苦を知れれば、くるしむ時は休めつ、まめなる時は使ふ。つかふとても、たびたび過ぐさず、ものうしとても、心をうごかすことなし。いかに況や、常にありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞ徒らにやすみ居らむ。人を苦め、人を惱ますは、又罪業なり。いかが他の力をかるべき。

衣食のたぐひ亦おなじ。藤の衣、麻の衾、得るに隨ひて肌をかくし、野邊の茅花、峰の木の實、命をつなぐばかりなり。人にまじらはざれば、姿を恥づる悔もなし。かて乏しけれ、ばおろそかなれども、なほ味を甘くす。すべて、かやうの事

三界
欲界色界無色界
七珍
金銀瑠璃瑪瑙珊瑚琥珀硨磲

樂み富める人に對していふにはあらず、たゞ我身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。大かた、世を遁れ捨てしより、うらみもなくおそれもなし。命は天運に任せて、惜まず、いとはず。身をば浮雲になずらへて、賴まず、まだしとせず。一期のたのしびは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をりをりの美景に殘れり。

それ、三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍も由なく、宮殿樓閣も望なし。今、さびしき住居、一間の庵、みづから是を愛す。おのづから都に出でては乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし、人このいへることを疑

はば、魚鳥の分野を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の氣味も、亦かくの如し、住まずして誰か悟らむ。（鴨長明――方丈記）

設問　充字及び正誤。

一　この世の中に於いて、一大事業を爲しとげやふとゆうことおとくに經くわくして、一生の間はげんで、力を用ゐさえすればそれさうおうの結果は必ずあるものである。

二　世間普通の青年には、そういふ志といふ物が無くて、唯々大浪に卷き込まれて、大海にたゞようているよふなぐあひで、あちらに隨ひ、こちらに赴くといふやうに、斷へずぶら附ひて居る有樣である。

九　雜感　五章

一　和歌

山がつ　ふすゐの床　碎けたる姿　衆議判　いさや　歌枕　郢曲　ことぐさ

和歌こそなほをかしき物なれ。あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出づれば面白く、おそろしきゐのしゝも、ふすゐの床といへば、やさしくなりぬ。

この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外にあはれにけしき覺ゆるはなし。貫之が「糸によるものなら

糸による

糸によるものならなくにわかれ路の心ほそくもおもほゆるかな

なくに」といへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へけれど、今の世の人の詠みぬべき事柄とは見えず。其世の歌には、姿言葉この類のみ多し。此歌に限りて、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、「ものとはなしに」とぞ書ける。新古今には、「殘る松さへ嶺にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、誠にすこし碎けたる姿にもや見ゆらむ。されど、この歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されける由、家長が日記には書けり。

殘る松さへ冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ嶺にさびしき—祝部成仲

家長 源家長

歌の道のみ古に變らぬなどいふ事もあれど、いさや、今も詠みあへるおなじ詞・歌枕・も、昔の人の詠めるは、更にお、

なじものにあらず、やすくすなほにして、すがたもきよげに、あはれも深く見ゆ。

梁塵祕抄 書名。神樂催馬樂を集む。後白河院の編纂に係るといふ

梁塵祕抄の郢曲のことばこそ、又あはれなる事は、多かめれ、昔の人は、唯いかにいひすてたることぐさも、皆いみじくきこゆるにや。

飛鳥川 大和國高市郡に在り

桃李云々 桃李不レ言春幾暮、烟霞無レ跡昔誰栖—菅三品の詩

二　飛鳥川の淵瀬

野ら　あせはてむ　金堂　そのかた　侍るめり　名殘だに

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり、事去り、樂び悲び行きかひて、花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は、人あらたまりぬ、桃李ものいはねば、誰と共にか昔を語らむ。

京極殿、法成寺　共に藤原道長の邸宅たりし處

御堂殿　藤原道長

正和　花園帝の御世の年號

行成　藤原行成、一條帝の頃の人、日本三蹟の一人也

兼行　藤原兼行、後三條帝の頃の能書家也

まして、見ぬ古のやむごとなかりけむ跡のみぞ、いとはかなき。京極殿・法成寺・など見るこそ、志とゞまり、事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の造りみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、我御ぞうのみ、御門の御後見・世のかため・にて、行末までとおぼし置きし時、いかならむ世にも、かばかりあせはてむとはおぼしてむや。大門・金堂・など、近くまでありしかど、正和の頃南門は燒けぬ、金堂は、其後倒れたるまゝにて、とり立つるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはしします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂などもいまだ侍るめり。これも又

いつまでかあらむ。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから石ずゑばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。

されば、よろづに見ざらむ世までを思ひおきてむこそ、はかなかるべけれ。

三　過ぎにし方

具足　とりしたゝむ　反古　見出でたる

しづかに思へば、よろづ過ぎにし方の戀しさのみぞ、せむ方なき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじと思ふ反古など、やり棄つる中に、なき人の手ならひ畫かきすさびたる見出でたるこ

そ、唯その折の心地すれ。此頃ある人の文だに、久しく成りて、いかなる折いつの年なりけむと思ふは、哀なるぞかし。手馴れし具足なども、心もなくて變らず久しき、いとかなし。

四　大事を思ひたたむ人

さながら　えさらぬ事　おほやう　あらまし　一期

大事を思ひたたむ人は、去りがたき心にかゝらむ事のほいを遂げずして、さながら捨つべきなり。

しばし此事はてて。同じくはかの事沙汰しおきて。しかじかの事、人の嘲やあらむ、行末難なくしたゝめまうけて。年來もあればこそあれ、其事待たむ程あらじ、物さわがしからぬやうになど思はむには、え去らぬ事のみいとゞかさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。

おほやう人を見るに、少し心あるきはは、皆このあらましにてぞ一期はすぐめる。

近き火などにぐる人は、しばしとやいふ。身をたすけむとすれば、恥をもかへり見ず、財をもすてて遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の責むるよりも速に、遁れがたきものを、其時老いたる親、幼き子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらむや。

五　竹林院入道

竹林院入道 西園寺公衡
一上 左大臣
洞院左大臣 洞院實泰
相國 太政大臣
亢龍の悔 亢龍有レ悔盈不レ可レ久也―易、乾の卦上九の語

一上　甘心　相國　亢龍の悔

竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがり給はむに、なにのとゞこほりかおはせむなれど、めづらしげなし、一上にてやみなむとて、出家し給ひけり。洞院左大臣殿此事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふこと侍るなり。月滿ちては虧け、物盛にしては衰ふ。よろづの事、さきのつまりたるは、やぶれに近き道なり。（吉田兼好―徒然草）

設問　充字及び正誤。

蜜のあまきは亞米利加人にもあまく、亞弗利加人にもあまし。こせうのからきは英吉利人にもからく、たいわんの生ばんにもからし。人情はいづくに行きても、あんぐわいに同じものにて、れいこくなる人は

隣家にもあれば、外國に行きても人鬼ばかりあるにあらず。しづがふせやにも月がさし、いばらの木にも花が咲くが、世の常に候。まして、文明諸國民の間にをいておや。五洲をかけ歩けばとて何の恐るべきこともこれあるまじく候。但し、その暖き情思をくみ心やすきかうさいを訂する能わざるは、彼我の言語を明會せず、彼我の意志に疎通せざる所あるが爲にして、遂には國外に出掛くることを、何となくちぎせしめる次第にこれあり候。

一〇　四季のあはれ

なまめかし　野分　いはじ　すさび　をさをさ　やり水　春のいそぎ　追儺　つごもり　ことごとし

折節の移り變るこそ、物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるもの

にて、今ひときは心もうき立つものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草萠え出づる頃より、やゝ春深く、霞わたりて、花もやうやうけしき立つ程こそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、萬に唯心をのみぞなやまする。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古の事も立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤の覺束なきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世の哀も、人の戀しさもまされと人の仰せられしこそ、げに

灌佛　四月八日釋迦の誕生會

さるものなれ。五月、菖蒲ふく頃、早苗とる頃、水雞の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に、夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓又をかし。

七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田かりほすなど、とり集めたる事は、秋のみぞ多かる。又、野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語・枕草紙。などにことふりにたれど、おなじ事又今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

祭　賀茂祭、陰暦四月中の酉の日に行ふ

六月祓　名越祓ともいふ六月晦日に行ふ大祓の事也

源氏物語　小說、紫式部の作

枕草紙　隨筆、清少納言の作

御佛名　十二月十九日より三日間禁中にて行ふ佛事

荷前の使　十二月吉日十陵（山階田原柏原八島深草後田原後山階宇治中宇治今宇治）八墓（多武峰愛宕葛野後葛野宇治小野後小野後宇治）に幣帛を奉らしむる勅使

さて、冬がれのけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおける朝、やり水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。御佛名・荷前の使立つ・などぞ、あはれにやむごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとり重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜、いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門叩き、走りありきて、何事にかあらむことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。なき人の來る夜とて魂祭るわざは、此ごろ都にはなきを、あづまの方にては猶する事にてありしこそ、哀なりしか。

かくて、明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。（吉田兼好―徒然草）

設問一　漢字の異同。

稜と棱　摹と摸　恥と耻　冲と沖　鈎と釣と鉤

設問二　過去の助動詞が加行變格及び佐行變格の動詞に連續する方法如何。

一一　花はさかりに

まかる　かたくな　望月　あからめ　連歌　わりなし　らうがはしさ　こゝら行きかふ　餘所に聞く

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情深し。咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭などこそ、見所多けれ。歌のことばがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ。」とも、「障ることありて、まからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れることかは。花の散り月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、殊にかたく

千里の外　古詩に、三五夜中新月中新月色、二千里外故人心といふ句あり

なる人ぞ、「この枝・かの枝・散りにけり、今は見所なし。」などはいふめる。

萬の事も始終こそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・白樫・などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都戀しう覺ゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は、閨の中ながらも思へるこそ、いと

たのもしうをかしけれ。

よき人は偏にすけるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。片田舎の人こそ、色こく萬はもて興ずれ。花の下にはねぢより立ちよりあからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大なる枝、心なく折りとりぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて、跡つけなど、萬の物よそながら見ることなし。さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。見ごといと遲し。その程は棧敷不用なりとて、奥なる屋にて、酒飲み、物喰ひ、圍碁・雙六・など遊びて、棧敷には人を置きたれば、渡りさぶらふといふ時に、おのおの肝つぶるゝやうに爭ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はり

連歌 歌の上下二句を二人して詠むもの、鎌倉時代後は五十韵百韵五百韵千句と連ね詠む事行はる

祭 賀茂祭

出でて押し合ひつゝ、一事も見漏さじとまもりて、とありかかりと物ごとにいひて、渡り過ぎぬれば、また渡らむまでといひておりぬ。たゞ物をのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。若くすゑずゑなるは、宮づかへにたちゐ、人のうしろにさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず。わりなく見むとする人もなし。

何となく葵かけわたして、なまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなど思ひよすれば、牛飼・下部・などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくもさまざまに行きかふ。見るもつれづれならず。暮るゝ程には、立てならべつる車ども、處なく

葵かけわたす 賀茂祭には簾柱書棚調度等に葵を懸く

並み居つる人も、いづ方へか行きつらむ、程なく稀になりて、車などのらうがはしさもすみぬれば、簾・疊・もとり拂ひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。

かの棧敷の前を、こゝら行きかふ人の、見知れるがあまたあるにて知りぬ、世の人數もさのみは多からぬにこそ。この人皆失せなむ後、わが身死ぬべきに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大なる器に水を入れて、細き穴をあけたらむに、滴ること少しといふとも、おこたる間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野・

鳥部野・舟岡・さらぬ野山・にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば、棺をひさぐもの、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、有りがたき不思議なり。しばしも、世を長閑には思ひなむや。まゝ子だてといふ者を、雙六の石にて作りて、立てならべたる程は、取られむことをいづれの石とも知らねども、數へあてて一つを取りぬれば、其外は遁れぬと見れど、またまた數ふれば、かれこれまぬき行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵のいくさに出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世を背ける草の庵には、閑に水石を弄びて、これを餘所に聞

鳥部野　京都の邊隅に在る墓地

まゝ子だて　黑白の石を二〇三〇五〇二〇二〇四〇一〇三〇一〇二〇二〇一と各十五宛三十を並べ十にかゝる石を取る遊戯也

くと思へる、いとはかなし。靜かなる山の奥、無常の敵きほひ來たらざらむや。その死に臨めること、いくさの陣に進めるにおなじ。（吉田兼好――徒然草）

設問 讀方及び意義。

新人　親炙　新機軸を出す　芻蕘　小故　攝籙　小照　對境　道破　黜陟　誅求　天禀　斗筲の人　鐺　鎬を削る

一二　秋雨

月の匂　似ぬものから　そぼふる　あはれ　うつろふ　しるかりみを　とは　さすがに　やがて　おのかじし

八月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくして、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きて宿りぬ。有明の月の匂

も、霧立ちわたる曙のさまも、ところがら世にも似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なむ、殊にあはれ深かりける。もとより茅葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろと散るもあはれなり。水の面は動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらはで、とはに花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。うち向ふ岸のはり原のみ墨がきの如くなるが中に、はゝその黄ばみたるは、さすがにほのかに見え

はゝそ　柞、槲の古名

殼斗科に屬する落葉性の喬木

て、そのひまびまより、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やうやうに淡墨もてかき消ちたらむが如く、いとしも遙けきは、たゞなびかぬ烟とのみぞ見ゆる。

こゝかしこより、鳥の飛び行きつゝ、塒の鷺の翅おもげに起き出で、河の瀨のまこもに下り立てば、みさごの群れ來て、水の面に浮べるもをかし。上つ瀨より、筏師の蓑笠著て、棹を筏の上によこたへ、おのれたむだきて、思ふ事なげにて居り。筏は水のまに〳〵流れゆくも、しづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけて渡り行く人の、やがて堤をありくありさまも、繪によく似たり。

すべて、ひと日のうちに、筑波根より吹きおろすと思へば沖よりも風かよひきて、岸の木立も、長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、かぎりなき青海原に向ひたらむやうに覺ゆるをりもありけり。かくて、やゝ夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじし塒もとむるに、雁のひとつらふたつら渡りゆくなど、えもいはむ方なし。暮れはてても、なほも行く水の色のみ遠く殘りて、川ぞひ小田にいはへる水分の神の御火の海士の漁火ともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

水分の神
水を掌る神

秋ふけてこさめそぼふる隅田川
たが墨がきのすさびなるらむ

（橘千蔭——うけらが花）

設問一　左の語について良行變格の四段活用と異なる點を説明せよ。

渡る　居る　知る　侍る

設問二　左の漢字の異同

場と塲　藉と籍　決と決　稀と希　惧と懼　蹤と跡

一三　雪中の眺望

妹なね　ほた　見さくる　天地のそぎへのきはみ　くまなく　たなづく　時じく　すゞろ

をりかこふ柴の籬も、山となりて隣をへだて、竹の下道あとたえて、訪ふ人もなし。「あなさぶしや。」といふ程に、「世にうもるゝわびずみの心やりには、酒こそよけれ。」と、妹なねが、ほたさしくべ、瓰の尻たきくろめて勸むるに、軒はくもれど、心はすこし晴れぬ。醉ふとはなしに浮かれいでて、手飼の駒にはひ乘るに、かき拂はぬ蓬の庭も玉しきわたし、枯れたる木どもも花咲きぬれば、野邊のあたりやいかならむと、鞭うつ駒の行きのまにまに、走り出の堤にのぼりて見さくるに、天地のそぎへのきはみ眞白にて、たゞ刀根の川浪一すぢぞ黑く流れたる。

野も山も雪にくまなく近よりて
とねのながれのかぎりをぞ見る

水上の新田・秩父・五百重山千重たゝなづく群山・を、何の山・くれの山・と、數へもてゆくに、遙けき峰より、け近く烟のたち上るも、めづらしや。ひとり思ひあがりて、なずらふべ

心だかくも　世の中を心高くもいとふかな富士の烟を身のおもひにて、新古今、慈圓

き山のなきにぞ、なにがしの嶽とは知らるゝ。「心だかくも」とこそは、いはまほしけれ。名だたる高嶺は、時じくものから、つぎてふりしく大雪に、この出でたてる見わたしより、武藏の大野のきはみ、遠白く麓につゞきて、天にはゞかる大傘をなかば開きたるさまにさし出でたるが、なほ珍らしくて、うつらうつら見つゝしをれば、駒の口はおさへとどめながら、心は空になむ行きける。

ふる雪に片びらきなる大かさを
　　さしてたたせる富士のしら山

などと、ひとりごちたる程に、一杯の酒もさめて、すゞろ寒くなりぬれば、駒ひきむけて歸りなむとす。

設問一　左の語句の中に見えたる「や」の意義及び文法上の關係を説明せよ。（橘守部——橘守部家集）

一　烟のたち上るも、めづらしや。
二　空氣の運動靜穩となるや、雲は漸く下降す。
三　かかる事のありや、なしや。

設問二　充字。

ちようばつ　かざす　かしづく　たはこと　つゐらく　ざんそ
じよくれい　たしかに

一四　玉づさ四篇

一　小澤蘆庵主のもとに

こゝら　うちつけ　春のほぎごと　いざ　ものみなは

千さとをへだて侍れど、こゝらの年月、まのあたり語らひかはし侍る心ちせらるゝまゝに、うちつけなるものから、たちかへる春のほぎごと聞え侍り。

君もわれももゝ世をへつゝ花鳥に
あくやあかずやいざこゝろみむ

「ものみなは」とか。む月六日の日、（橘千蔭――うけらが花）

ものみなは
ものみなはあらたしきよし只人はふりぬるのみぞよろしかるべき――萬葉集、作者未詳

二　人のもとより氷をおくれるに

やむごとなし　だに　めでくつがへり　おほやけのおもの　いぶせき伏屋　なかなかに　かしこし

土さへ裂くとかいふなるは、暮まつほどもいと待遠なるに、をりしも、やむごとなきあたりより頒ち給へるなりとて、暑さ忘れむ料にとて賜はれるは、いとめづらかにな

む。まづ手にとり侍るだに、そゞろ寒きまでおぼえ侍り。わらはどもはめでくつがへり侍りて、ひたひにのせ、胸にあてなどしつゝ、もて興じ侍るも、をかしうなむ。されど、こはおほやけのおものにも供へ侍ると聞くなるを、いぶせき伏屋の心やりぐさになし侍らむは、なかなかにかしこきわざなりや。とまれかくまれ、御まのあたりにこそ、よろこびは聞えつべけれ。

手にとるもあなめづらしなあつ氷
とほきつげ野のむかしおぼえて

つげ野
攝津國東成郡鬪鷄野、往昔氷室の在りし處

三　月の夜友のもとに

（村田春海——琴後集）

所せきつぼ　なりどころ　まかる　まらうど　あるじまうけ　そめいろの峰

いざたまへ、もろともに。この月のさやけきを、所せきつぼのうちにのみやは見はて侍らむ。なにがしのなりどころにまからむ。それもまらうどなどきあひて、あるじまうけする程ならば、それがしのかくれがにまからむ。それもありきたがひてあらぬ程ならば、此山の律師の室を驚かし侍らむ。それももし里におりたらむ程ならば、うしろの山にのぼりて、夜もすがらめであかさむを、いざたまへ、もろともに。

なべて世の塵をよそなる高山の
松のこずゑの月をいざ見む
そめいろの峰までもこそ。（清水濱臣——泊洒文集）

此山　東叡山
律師　僧官、僧正僧都の下に位して五位に准ぜらる、正權二等に分る

四　雪の朝友のもとに

たゝずまひ　思ひ給へざりき　あたらしく　さりとも　さうざうしさ　いでや　鳥の跡

けさのけしき、めづらしく御覽ぜずや。冬になるより、いつしかとのみ日毎に待ちわたり侍りしに、昨日のゆふべ、風いたく吹きあれ、雲のたゝずまひもいみじくさえわたりて、飛ぶ鳥のけしきまで、必ず降りぬべき空とは見えし

蘇迷盧　須彌山のこと　佛說に須彌山は一世界の中心に在つて高さ十六萬由旬（一由旬は四十里）四面各一色にて東は黃金南は南は瑠璃西は白金北は頗梨、帝釋天の居處其頂上に在りといふ

かど、いとかくまで深くとは思ひ給へざりきかし。あけくれ心へだてぬ友どちは、かからぬをりだに、何事につけても、まづ思ひ給へ出でらるゝわざなるを、ましてかくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身の、ひとりのみ見侍らむことのいとあたらしく思ひ給ふれば、よし跡つけても人の訪ひ給はましかば、こよなくをかしさもまさりぬべきものをと思ひ給ふるに、いかにとだに音づれもし給はぬは、いと思はずに、うらめしくなむ。この景色、さりとも見過しがたくはおぼさるらむものをとは思ひやり聞えさすれど、しろしめすやうに、いとうひうひしき口には、何事をもいはれ侍らず。筆の尻とる博士だに侍らで、とりつくろひ

侍らむやうも侍らねば、思ひ給ふるほどの心も、たゞおしこめてなむ。そこにはいかに見どころある心ふかき言の葉多くものし給ふらむ。一つ二つたまはせよかし。さてなむ、せばき庭の雪の光もくはゝりて、友なき今朝のさうざうしさをも慰め侍らむ。いでや、かく聞えさするも、もとよりあやしき鳥の跡の、今朝はいとゞ筆のさきしみこほりて侍れば、御覽じわくかたも侍らずや。あなかしこ。

（本居宣長――鈴屋集）

鳥の跡　事物原始に蒼頡二鳥跡因一而遂滋則謂二之字一とあり　頡は黄帝の臣也

設問　文法及び假名遣の正否。

一　今日行はずむば、いつの日をか期せん。

二　かれも明日は必ず早く來るべければ、親しく就ひて問はむと思ふなり。

三　僕はかよふの報告を受くるのを、甚だ遺憾に思ふております。

一五　月は世々の形見

翁のがり　清談　金樽　數獻　めでじ　うべ　舌を喰ふ　豪宕超逸　今を忍ぶ

今年も早や半過ぎぬれば、いつしか秋の氣色だちて、荻吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば、此程の老の寢覺も覺束なし。いざ訪ね問はむ。」とて、ある夕暮に、例の人々うちつれて來しが、「またも參らむ。」とて歸らむとせしを、翁とゞめて、「今宵は月もよし、薄酒すゝめ奉らむ。强ひてとまり給へ。」といへば、翁の心をいかで背くべき。さあ

青天有月　李太白集第二十卷「把酒問月」と題する詩の句

らば。」とて、各座を占めて、淸淡の露やうやう滋き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるまじまうけし、肴とりそへて盃出しけり。諸客みな醉ひて、興に入るとぞ見えし。

その中に、一人盃を停めて、

「青天有月來幾時。我今停盃一問之。」

と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、また二人脇よりつけて、

「人攀明月不可得。月行却與人相隨。」

とうたふ。また外の人々迭に唱和して、その次を、

「皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡淸輝發。」

とうたふ。又その次を、

「但見宵從海上來。　寧知曉向雲間沒。
白兎搗藥秋復春。　姮娥孤棲與誰鄰。」

とうたふ。その次よりは翁も助音して、

「今人不見古時月。　今月曾經照古人。
古人今人若流水。　共看明月皆如此。
惟願當歌對酒時。　月光長照金樽裏。」

とうたひをさめたり。その後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。

玉山倒る　嵇康字叔夜、爲人巖々若孤松之獨立、其醉也如玉山之將頹　晉書

さて翁いふやう、『大方は月をもめでじ。』とは詠みたれども、老の心も月見るにぞ慰み侍り。されど、それにつきて千

大方は月をもめでしこれぞこのつもれば人の老となるもの　伊勢物語、業平

載無窮の感も起りぬれば、うべ月を人の老となるともいふべかめり。但し、月を見るに色々あり。今思ひ出し侍り。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅に對ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくづくと見て、『月は徑り幾尺かあるべき。各考へて見給へ。』といふ。また同じやうの人かたへより、『あれは物の切口と見ゆ。奥へ長さ如何程かあらむ。』とて、互に僉議しけるを、聞く人々皆舌を喰ひけり。翁も稚な心にをかしかりき。

一丁字　書言故事に唐張弘世曰、天下無事爾輩挽二兩石弓一不レ如レ識二一丁字一、と、而して康熙字典に按二續世說一一丁作二一个一因二篆文个與レ丁相似一傳寫譌作レ丁と見ゆ

「今おもへば、世俗月を賞して、月の明きを誇り、影の清きにめでて、良夜とて唯うち寄り、物喰ひ酒飲みなどして歌ひのゝしるを樂とするは、かの寸尺を語るに等しかるべ

騷人
屈原作二離騷一言レ遭レ憂也、今謂二詩人一爲二騷人一―正字通

し。また騷人墨客の月を詠めて、字ごとに金玉を彫り、句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、それも唯景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人を慕ひて、その書を讀み、その心を知りつゝ、常に世を經たる恨あるに、月ばかりこそ、世々の人を照し來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば、月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影も映るやうに覺え、月は物言はねども、語るやうに覺えて、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。

今、李白が詩、月の景氣を捨てて、一氣に古今を洞觀して、『青天有レ月來幾時』といひ出づるより、氣象の高さ拔羣に聞

楚辭
書名、屈平の辭賦と其門下及び後人の作とを輯む

屈子
名は平、字は原、楚の懷王の頃の人、讒に遭ひ、江南に移さる、懷沙賦を作りて汨羅に投じて死す

えて、詩の豪宕超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。昔より李杜とて、杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。然れども、李白が詩も古今流水の如きを感ずるのみにて、後代を待つの心は見えず。翁、昔、楚辭を讀みて、『往者余弗レ及、來者吾不レ聞。』といふに至りて、屈子が心を推測りつゝ、感に堪へずなむ覺えし。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲みて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度逢うて語らうてと思へど、その世に及ばねば叶はず。また末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらむと思へど、その人を聞かねば、誰とか知らむとぞ。これなむ屈子に限らず、古今心あるきはは、大方この恨なきにし

もあらず。

翁も此心にして月を見るにや、いとゞ感深く覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの代にか、またわが如く、月に對して今を忍ぶ人なからむや。月はさこそ其世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さまほしと思ひ侍り。その心を、

月見れば末の代までも忍ばれて
見ぬいにしへのいとゞゆかしき

こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを考へ見給へ。いはれなきにはあらず。」といふ。（室鳩巣——駿臺雜話）

設問一 文法及び假名遣の正否

イ 豫定の日課を終らざるものは、門外に出ずべからず。

ロ 庭に栽ゆる草木さへ伸びたるを抑え、たほれたるを起しなどしてこそ、よき姿にはなるなりと、人のいひけれ。

設問二 漢字及び假名遣の正否

率いて　頽癈　重復　脱獄を奬む　嬉祠を崇拜す　功績　坎坷
執着　隨ふて　辨論　撰擇

一六　壬子試筆の詞

白駒　鄒魯の風　三綱五常　蚍蜉　沙汰　承けられね　阿世曲學
失はじ

日月迭に移りて、白駒の隙過ぎ易く、衰病日に侵して、黄金の術成り難し。されば、犬馬の齡これまであるべしともいはざりしが、いつしかも老の波寄り來て、今年は七十あ

黄金の術
丹砂可三化爲二黄金一黄金成

以爲二飲食器一則益レ壽一史記

董生

漢書董仲舒傳に、下レ帷發レ憤讀レ書三年不レ窺レ園とあり。仲舒は文帝の臣也

邯鄲の步

子獨不レ聞三夫壽陵餘子之學二行於邯鄲一與、未レ得二國能一又失二其故行一矣、直匍匐

まり五つの春にもなりぬ。剩へ、近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居も惱めるまゝに、昔の董生を學ぶとにはあらねども、この三とせ、春の園を窺ふことも叶はねば、閨の中ながら、梢に傳ふ鶯の音に殘りの夢をさまし、枕に薫る梅が香に過ぎし昔を忍ぶばかりになむありける。

しかはあれども、幸に若かりしより學の窓に年を經るかひありて、程朱の道にしたがひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて邯鄲の步を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべき。

さても、多くの年月を經て、世の移り變る有樣を考ふる

而歸耳—莊子。邯鄲は趙の都也

富貴云々

不義而富且貴於レ我如二浮雲一—論語

禍福云々

因レ禍爲レ福成敗之轉譬若二糾纏一—史記

精衞

發鳩之山有レ鳥曰二精衞一是炎帝之女往

に、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはむ、現とやいはむ。誠に、富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如しといへるに、何か違ふ事あるべき。中に、唯わが聖人の建て給へる三綱五常の道のみ、天地と竝び傳へ、古今の隔なく、こればかりは變ることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきは、この道ぞかし。然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理に疎く、利欲にさとくなる程に、五常の道廢れて、風俗日に下り行くこそ歎かはしけれ。もとより、賤しき身にて、一代の風教を維持せむとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに、蚍蜉の樹を撼かし、精衞が海を塡むるに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも、わが

遊二于東海一溺而不レ反是故精衛常取二西山之木石一以塡二東海一——山海經

あら玉の枕詞

儒分内の事なれば、これを度外に措くべきにあらず。

世に老師宿儒と稱する人の、好みて異説を肆にし、また は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をば餘所にするこそ承けられね。唯務めて新奇を競ひて、俗耳を悅ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口をしき事なり。古人の所謂、阿世曲學とは、これらをいふなるべし。

よし、人はさもあらばあれ、たとひ昔にあらずなりぬとも、我身一つは、もとの如く仁義の道を守りつゝ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりししるしともいふべけれ。然るに、あら玉の春の始とて、人は皆おのが志、身の福を萬代と祝ふ中に、われは唯五常の道に心をよせて、

いつもかはらずめでたきものはこの道なりとて、かくなむ筆を試むるならし。

この春もかはらでゆかむ七十に
あまる五つの道をたづねて

（室鳩巣——駿臺雜話）

設問　左の文について、文法上の係結といふことを説明せよ。

一　仁義五常の沙汰をば、餘所にするこそ承けられね。

二　珍らしき春もあすとぞ聞ゆれば
くれなむ年をなにかをしまむ

一七　裾野の旅

淼々　命をたばふ志　野に塞ぐ商客　幻中の一瞬の身　凌ぎ行く

極浦の浪　長松の風　天漢　人寰

江尻の浦を過ぐれば、青苔石に生ひ、黑布磯に張る。南は澳の海淼々と波を湧して、孤帆天に飛び、北は茂松欝々と枝を垂れて、一道弦を成す。漁夫の網を曳く、身を助けむとして身を苦め、游魚の鉤を呑む、命を惜みて命を滅す。人いくばくの利をか得たる。魚いくばくの餌をか求むる。世をはしる思、命をたばふ志、かれもこれも共に同じ。これのみかは、山に汗かく樵夫は北風を擔ひて夕に歸り、野に蹇ぐ商客は白露を拂うて曉に出づ。面々の樂まちまちなりと雖も、おのおのの苦は、皆これ渡世の一事なり。

人ごとにはしる心はかはれども

江尻
駿河國庵原郡に在る一驛

海松
綠色藻類に屬する海草、淺海の岩石に附著して生ず

海月
腔腸動物の一種、寒天質の鐘狀又は傘狀をなし其緣に多數の觸絲と感覺器とを有す

清見が關
駿河國庵原郡興津町清見寺の地に在りしとも薩埵峠の岫崎に在りしともいはる

世をすぐる道はひとつなりけり

この浦を遙に見渡して行けば、海松は波の岩根に根を離れたる草、海月は潮の上に水にうつる影、ともにうき世を論じて、人を戒めたり。

波の上にたゞよふ海の月もまた
うかれ行くとぞわれを見るらむ

清見が關を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまどはし、東北は山と磯と嶮難おなじく足をつまだつ。巖の下には波の花風に開さて春の定なく、峰の上には松の色綠を含みて秋を恐れず。浮天の波は雲を汀にて月のみふね夜出でて漕ぎ、沈陸の磯は巖を道にて風の使脚あし

たに吹きて過ぐ。名を得たるところ必ずしも興を得ず、耳に耽るところ必ずしも目にふけらず。耳目の感二つながら得るは、この浦にあり。

海老は海に泳ぎ、愚老は汀に漂ふ。ともに老いて腰かゞまる。汝は知るや、生涯うかべる命、今いくほどと。われは知らず、幻中の一瞬の身。かくて、おき津の浦を過ぐれば、鹽釜の煙かすかに、浦人の袖うちしをれ、宅邊には小魚をさらして、屋上に鱗を葺けり。松のむら立、浪のゆる色、心なき身にも心あらむ人に見せまほしくて、

たゞぬらせ行手の袖にかゝる波
ひるまのほどは浦風の吹く

岫崎　薩埵峠の西角今東海道鐵道の隧道の在る邊をいふ

由井　今は由比と書

岫崎といふところは、風飄々と飜つて砂をまはし、波浪浪と亂れて人をしきる。行客こゝにたづさはりて、しばらく寄せ引く浪間をうかゞひて、急ぎ通る。左は嶮岳の下と岩の間とを凌ぎゆく。右はかすかなる浪の上を望めば、眼迷ひぬべし。はるばると行くほどに、大和田の浦に來て、小舟の沖中にたゞよへるを見る。飄帆飛んで萬里風便をたのみて白煙に入り、鼇波動きて千里夕陽を洗ひて紅藍に染む。海館のうちに心をのみとゞめて、身をばとゞめず。

忘れじな波のおもかげうちそひて
すぐるなごりの大和田のうら

由井の宿を立ちて、遙々行けば、千本の松原といふとこ

く、庵原郡の一驛、其東の宿を蒲原といふ

ろあり。老の眼は極浦の浪にしをれ、朧なる耳は長松の風に拂ふ。晴の天の雨には、翠蓋のかさあれば、袖をたぐらず。砂の濱の水には、白花散れども、風を恨みず。行く行くあとを顧れば、前途いよいよゆかし。

ききわびぬちぢの松原吹く風の
ひと方ならずわれしをる聲

蒲原の宿にとまりぬ。菅薦の上に臥せり。あくる日、蒲原を立ちて、遙に行けば、前路に進み先立つ人は、馬に水かひで、後河にさかりぬ。後程にさかり來るおのれは、野に草しきて、まだ來ぬ人を先にやる。先後のあはれは、行旅の習にも思ひ知られて打過ぐるほどに、富士川を渡りぬ。この河

巫峽 支那の四川省から湖北省に入る川の兩岸白氏文集行路難に太行之路能摧レ車若比二人心一是夷途、巫峽之水能覆レ舟若比二人心一是安流の句あり

老馬云々 管仲隰朋從二於桓公一而伐二孤竹一春往冬反迷惑失レ道管仲曰老馬之智可レ用也乃放二老馬一而隨レ之遂得レ道—韓非子說林

中にこそ石を流せ、巫峽の水のみ何ぞ舟を覆さむや。人の心は、この水よりさがしければ、老馬をたのみてうち渡る。老馬、老馬、汝は智ありければ、山路の雪のみにあらず、河の底の心もよく知りにけり。

音にききし名高き山のわたりとて
そこさへ深しふじの河水

浮島が原を過ぐれば、名は浮島と聞ゆれど、まことは海中とは見えず、野徑とは見つべし。草むらあり、木の林あり。遙に過ぐれば、人煙片々と絶えてまた立つ。新樹程を隔てて、隣互に疎し。東行西行の客は皆知音にあらず、村南村北の道に唯山海を見る。すべて、この峰は天漢の中にぬきい

で、人寰の外に見ゆ。眼をいたゞきて立ち、魂恍々と惚れたり。

いくとせの雪つもりてか富士の山
いたゞき白き高嶺なるらむ

（源光行——海道記）

設問一 讀方及び意義。

銓衡　掣肘　大夫　春色駘蕩　瞠若　黄昏　抽象　月次　强顔
傳票　承塵

設問二 充字。

きくわん　きしせんめい　きうたう　かつさい　かいざん　えつ
らん　うくわつ

一八　水無瀬殿　其一

まだし　心ゆく　艶に　霞の洞　別當　ひがぎき　こたみ　歌合
あて人　そこひなく　ゆりたる　けしう　まろ　竟宴

第一の御子　後鳥羽院の第一の皇子爲仁、後に土御門院と申す

建久九年正月十一日、第一の御子四つになり給ふに、御位讓り申させ給ひて、おりゐ給ふ。御年十九。位におはしますこと、十五年なりき。けふあす、二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御有樣よりは、なかなかやすらかに、御幸など御心のまゝならむとにや世を知ろしめす事は、今もかはらねば、いとめでたし。

鳥羽、殿白河殿

鳥羽殿・白河殿・なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ま

鳥羽は山城國紀伊郡に、白河は同愛宕郡に在り

水無瀨　同國乙訓郡に在り

元久の頃云々　元久詩歌合一卷、今群書類從に收む

せ給へど、なほ、また、水無瀨といふ處に、えもいはず面白き院づくりして、しばし通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり、世をひゞかして遊をのみぞし給ふ。處がらも、はるばると川に臨める眺望、いとおもしろくなむ。元久の頃、詩に歌を合せられしにも、とりわきてこそは、

みわたせば山もとかすむ水無瀨川
ゆふべは秋となにおもひけむ

かやぶきの廊・渡殿・など、はるばると、艶に、をかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げにげに千

院　後鳥羽院

代をこめたる霞の洞なり。

今の帝の御諱は、爲仁と申しき。攝政は院の御時の關白基通のおとゞ、其後は後京極殿良經と聞え給ひし、いと久しくおはしき。このおとゞは、いみじき歌のひじりにて、院のうへ同じ御心に、和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の頃、千載集ありしかど、院いまだきびはにおはしましし かばにや、御製も見えざめるを、當帝位の御程に、また集めさせ給ふ。土御門の內のおとゞの二郎君右衞門督通具といふ人を始にて、有家の三位・定家の中將・家隆・雅經・などにのたまはせて、昔より今までの歌を、ひろく集めらる。おのおの奉れる歌を、院の御前にて、みづからみがきとゝのへ

延喜 後醍醐帝の御世の年號

天暦 村上帝の御世の年號

梨壺の五人 大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望樹。梨壺は昭陽舍にて溫明殿の北、麗景殿の東に在り

させ給ふさま、いとめづらしくおもしろし。この時も、先に聞えつる攝政殿、とりもちて行はせ給ふ。

おほかた、いにしへ、奈良の帝の御代に、始めて、左大臣橘の朝臣勅を承りて、萬葉集を撰びしよりこの方、延喜の聖の御時の古今集、友則・貫之・躬恒・忠岑、天暦の賢かりし御代にも、一條攝政殿（謙德公）いまだ藏人少將など聞えける頃、和歌所別當とかやにて、梨壺の五人に仰せられて、後撰集は集められけるとぞ。ひがきにや侍らむ。その後、拾遺集は花山法皇のみづから撰ばせ給へるとぞ。白河院位の御時、後拾遺集、通俊治部卿うけたまはる。崇德院の詞花集は顯輔三位えらぶ。白河院おりゐさせ給ひてのち、金葉集重ねて

輔仁親王 白河院の第三の宮

千五百番歌合 建久元年後鳥羽院御製を始め後京極攝政以下男女三十人の歌人に各百首を奉らしめて相番へた

俊頼の朝臣に仰せて、撰ばせ給ふ。はじめ奏したりけるに、輔仁親王の御なのりを書きたる、わろしとて、なほされ、また奉れるにも、何事とかやありて、三度奏してこそ、をさまりにけれ。かやうのためしも、おのづからの御事なり。おしなべては、撰者のまゝにて侍るなれど、こたみは、院のうへ、みづから和歌の浦におりたちてあさらせ給へば、まことに心ことなるべし。

この撰集より先に、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、すぐれたるかぎりを擇ばせ給ひて、その道のひじりたち判じたるに、やがて院も加らせ給ひながら、「なほ、このなみにはたち及びがたし。」と、卑下せさせ給ひて、判の詞をば記

るをいふ

されず、御歌にて、まさり劣れる志ばかりをあらはし給へり。なかなかいと艶に侍りけり。

上の、その道を得給へれば、下も、おのづから時を知るならひにや、男も女も、この御代にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の帝の御後に、俊房の左のおとゞと聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つかさ淺くて、うち續き四位ばかりにて失せにし人の子なり。まだいと若き齡にて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いとありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院のうへ、のたまふやう、「こたみは、皆、世にゆりたる古き道のものどもなり。宮内卿はまだし

俊房
源俊房

かるべけれど、けしうはあらずと見ゆめればなむ。構へて、まろがおもて起すばかり、よき歌仕うまつれ。」と仰せらるるに、おもてうち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、限なきすきの程も、あはれにぞ見えける。その御百首の歌、いづれもとりどりなる中に、

うすくこき野邊のみどりの若草に
　あとまで見ゆる雪のむらぎえ

草のみどりの濃き薄き色にて、去年のふる雪の、遲く疾く消えける程を推しはかりたる心ばへなど、まだしからむ人は、いと思ひよりがたくや。この人、年つもるまであらましかば、げに、いかばかり、目に見えぬ鬼神をも動かしなま

目に見えぬ

云々
力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ男女の中をも和げ猛き武士の心をも慰むるは歌なり―古今集序

春日殿
一條の北に在り春日明神を祭るによりていふとぞ

しに、若くて失せにし、いと、いとほしく、あたらしくなむ。

かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月二十六日、竟宴といふ事、春日殿にて行はせ給ふ。いみじき世のひゞきなり。

一九　水無瀬殿　其二

さうどき　うへ人　朝臣　殿上の賭弓　けしかるわざ　かづく
はしたなし　あいぎやう　おろか　魚袋　ほとほと

かくて、院の上、ともすれば、水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、琴笛の音につけ、花紅葉の折々にふれて、よろづの遊びわざをのみ盡しつゝ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。まこ

修明門院
順德院母の重子

とに、よろづ世もつきすまじき御世のさかえ、つぎつぎ、今よりいと頼もしげに見えさせ給ふ。

御碁打たせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これかれ心のひきひきに、いどみ爭はせ給へば、あるは小弓・雙六・などいふ事まで、思ひ思ひに勝負をさうどきあへるも、いとをかしう御覽じて、さまざまの興ある賭物どもとうでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて、修明門院の御方へ、「何にても、をのこどもに賜はせぬべからむ賭物」と申させ給ひたるに、とりあへず小き唐櫃の金物したるが、いと重らかなるを參らせたり。この御使のうへ人、何ならむと、いといぶかしくて、片端ほのあけて見るに、錢なり。い

と心得ずなりて、さと面うち赤めて、あさましと思へる氣色しるきを、院御覽じおこせて、「朝臣こそ、むげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より殿上の賭弓といふ事には、これをこそ賭物にはせしか。されば、今賭物と聞えたるに、これをしも出だされたるになむ。古の事知り給へるこそ、いたきわざなれ。」と、ほゝゑみてのたまふに、さは惡しく思ひけりと、心地さわぎて覺ゆべし。

おほ方、この院の上は、よろづの事にいたり深く、御心も花やかに、物にくはしうぞおはしましける。夏の頃、水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて、氷水召して、水飯やうの物など、若き上達部・殿上人・どもに賜はせて、大みきまゐるつい

釣殿　對の屋より中門廊を隔てて池に臨める殿

でにも、「あはれ、いにしへの紫式部こそは、いみじくはありけれ。かの源氏物語にも、『近き川のあゆ、西川より奉れる石ぶしやうのもの、御前に調じて。』と書けるなむ、すぐれてめでたきぞとよ。唯今さやうの料理つかまつりてむや。」などのたまふを、秦の某とかいふ御隨身、勾欄のもと近く候ひけるが、うけたまはりて池の汀なる笹をすこし敷きて、白きよねを水に洗ひて奉れり。「拾はば消えなむとにや。これもけしかるわざかな。」とて、御衣ぬぎて、かづけさせ給ふ。御かはらけたびたびきこしめす。その道にも、いとはしたなう物し給ふ。何事もあいぎやうづき、めでたく見えさせ給ふ御有樣など、千年を經とも、飽く世あるまじかめり。

近き川　賀茂川
西川　桂川

御隨身　上皇執政大臣以下上達部諸衛佐まで護衛として附する近衛の舍人

拾はば云々　源氏物語幕木に、御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなむと見ゆる玉篠の上の霰云々と見ゆ

また、清撰の御歌合として、限なくみがかせ給ひしも、水無瀬殿にての事なりしにや。當座の衆議判なれば、人々の心ち、いとゞおき所なかりけむかし。建保二年九月の頃、勝れたるかぎりぬきいで給ふめりしかば、いづれかおろかならむ。中にもいみじかりし事は、第七番に、左、院の御歌、

明石潟浦路はれ行く朝なぎに
きりに漕ぎ入るあまの釣舟

とありしに、北面の中に、藤原秀能とて、年ごろも此道に許りたるすきものなれば、召し加へらるゝこと、常の事なれど、やむごとなき人々の歌だにも、あるは一首・二首・三首・には過ぎざりしに、この秀能九首まで召されて、しかも院の

北面　仙洞を警衛する武士の詰所をいひ轉じて其武士をもいふ

御かた手に參れり。さて、ありつるあまの釣舟の御歌の右に、

契りおきし山の木の葉の下もみぢ
そめしころもに秋風ぞ吹く

と詠めりしは、その身の上にとりて、ながき世のめんぼく、何かはあらむとぞ聞き侍りし。昔の躬恒が御階の下に召されて、「ゆみはりとしもいふ事は。」と奏して、御衣たまはりしをこそ、いみじき事にはいひ傳ふめれ。また、貫之が家に、枇杷のおとゞ、魚袋の歌のかへしとぶらひにおはしたりしをも、道の高名とこそ、世繼には書きて侍れ。近き頃は、西行法師ぞ、北面のものにて、世にいみじき歌のひじりなり

ゆみはり云々　照る月を弓はりとしもいふことは山べをさしていればなりけり—凡河内躬恒

枇杷の大臣　藤原仲平をいふ、されど魚

しが、今の代の秀能は、ほとほとふるきにもたちまさりてや侍らむ。（作者未詳――増かゞみ）

設問 讀方及び意義。

奈落　賢所　宿直　上蔲　譜代　朝覲　意馬心猿　杜撰　追善

通事　消長

袋云々の事は九條師輔の上にありし事也委しくは大鏡に見ゆ

世繼　大鏡

二〇　大原御幸　其一

白屋　布施　菩提　國母　昔を忍ぶつま　岩の狹間　仙家

建禮門院は、東山の麓、吉田の邊なる處にぞ、立入らせ給ひける。中納言法印慶慧と申す奈良法師の坊なりけり。住み荒らして年久しう成りければ、庭には草深く、軒には葱

法印　最高位の僧位具さには法印大和尚位といふ、僧官の僧正に相當す

茂れり。簾絶え閨露はにて、雨風たまる樣もなし。花は色々匂へども、主と賴む人もなく、月は夜々差入れども、詠めて明かす主もなし。昔は玉の臺を瑩き、錦の帳に纏はれて、明かし暮らさせ給ひしが、今はありとしある人にも皆別れ果てて、淺ましげなる朽坊に入らせ給ひける御心の中、推量られて哀なり。魚の陸に上れるが如く、鳥の巢を離れたるが如し。さる儘には、憂かりし波の上、船の中の御住居も、今は戀しうぞ思召されける。蒼波路遠、寄思於西海千里雲、白屋苔深、落淚於東山一庭月。悲しともいふばかりなし。

かくて女院は、文治元年五月一日の日、御髮落させ給ひけり。御戒の師には、長樂寺の阿證坊の上人印誓とぞ聞え

先帝
安德天皇

し。御布施には、先帝の御直衣なり。今はの時までも召されたりければ、其御移香も未だ失せず。御形見に御覽ぜむとて、西國より遙々と都まで持たせ給ひたりければ、如何ならむ世までも、御身を放たじとこそ思召されけれども、御布施に成りぬべき物のなき上、且は彼御菩提の爲にもとて、泣く泣く取出でさせ給ひけり。上人之を賜つて、何と奏すべき旨もなくして、墨染の袖を顏に押當てて、泣く泣く罷出でられけり。件の御衣をば幡に縫うて、長樂寺の佛前に懸けられけるとぞ聞えし。

女院は十五にて女御の宣旨を蒙り、十六にて后妃の位に備り、君王の側に候はせ給ひて、朝には朝政を勸め、夜は

夜を專とし給へり。二十二にて皇子御誕生あつて、皇太子に立ち、位に即かせ給ひしかば、院號蒙らせ給ひて、建禮門院とぞ申しける。入道相國の御娘なる上、國母にてましませば、世の重うし奉ること斜ならず。今年は二十九にぞ成らせ給ふ。桃李の御粧猶濃かに、芙蓉の御形未だ衰へさせ給はねども、翡翠の御簪著けても何にかはせさせ給ふべきなれば、遂に御樣を變へさせ給ひてけり。

浮世を厭ひ實の道に入らせ給へども、御歎は更に盡きせず。人々今はかくとて海に沈みし有樣、先帝・二位殿の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならむ世までも忘るべしとも思召さねば、露の御命の何しに今まで存へて、かかる

憂目を見るらむと思召しつゞけて、御涙せき敢へさせ給はず。五月の短夜なれども明かし兼ねさせ給ひつゝ、おのづからも打目睡ませ給はねば、昔の事をば夢にだにも御覽ぜず。壁に背ける殘の燈の影幽かに、夜もすがら窓打つ暗き雨の音ぞさびしかりける。上陽人が上陽宮に閉ぢられたりけむ悲も、これには過ぎじとぞ見えし。

上陽人　唐の玄宗皇帝が楊貴妃のみを愛して他の女官遂をば遠ざけたりしが其中の上陽宮に置かれたる女をいふ

昔を忍ぶつまとなれとてや、故の主の移し植ゑ置きたりけむ花橘の、軒近く風なつかしう薫りけるに、山郭公の二聲三聲音づれければ、女院ふるき事など思召し出でて、御硯の蓋にかうぞ遊ばされける。

郭公花たちばなの香をとめて

なくは昔の人や戀ひしき

女房達は、二位殿・越前三位の上・の樣に、さのみ猛う水の底にも沈み給はねば、武士の荒けなきに捕はれて舊里に歸り、若きも、老いたるも、樣を變へ形を窶し、あるにもあらぬ有樣にて、思ひもかけぬ谷の底・岩の狹間・にてぞ明かし暮らし給ひける。住まひし宿は皆煙と立ちのぼりしかば、空しき跡のみ殘つて、茂き野邊と成りつゝ、見馴れし人の訪ひ來るもなし。仙家より歸つて、七世の孫に逢ひけむも、かくやと覺えて哀なり。

仙家より歸つて云々　晉の王質が仙界に行き碁を見て歸りしに七世を經たりといふ故事―述異記に出づ

二一　大原御幸　其二

綠衣の監使　沙汰　成等正覺　頓證　有涯

去程に、去んぬる七月九日の日の大地震に、築地も壞れ、荒れたる御所も傾き破れて、いとゞ住ませ給ふべき御便もなし。綠衣の監使宮門を守るだにもなし。心の儘に荒れたる籬は、茂き野邊よりも露けく、折知りがほに、いつしか蟲の聲々恨むるも哀なり。夜も漸う長く成れば、いとゞ御寢覺がちにて、明かし兼ねさせ給ひけり。盡きせぬ御物思に、秋の哀さへ打添ひて、いとゞ忍び難うぞ思召されける。何事も變り果てぬる浮世なれば、自ら情を懸け奉るべき昔の草の緣さへ枯れ果てて、誰はごくみ奉るべしとも見え給はず。されども、冷泉大納言隆房卿の北の方・七條修理

玉鉾の道の枕詞

大夫信隆卿の北の方・忍びつゝ漸う訪ひ申させ給ひけり。「あの人どものはごくみであるべしとこそ昔は思はざりしか。」とて、女院御涙を流させ給へば、附き參らせたる女房達も、皆袖をぞ絞られける。

此御住居も猶都近く、玉鉾の道行人の人目も繁ければ、露の御命の風を待たむ程は、憂き事聞かぬ深き山の奥が奥へも入りなばやとは思召されけれども、さるべき便もましまさず。或女房の參つて申しけるは、「是より北、大原山の奥寂光院と申す處こそ、閑に候へ。」と申しければ、「山里は物の寂しき事こそあんなれども、世の憂きよりは住みよかんなるものを。」とて、思召し立たせ給ひけり。御輿などを

寂光院　山城國愛宕郡大原村に在り。延暦寺の別所

ば、隆房卿の北の方より、御沙汰ありけるとかや。

文治元年長月の末に、かの寂光院へ入らせ給ふ。道すがら四方の梢の色々なるを御覽じ過させ給ふ程に、山陰なればにや、日も既に暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の音すごく、分くる草葉の露滋み、いとゞ御袖濡れまさり、嵐烈しく木の葉亂りがはしく、空かき曇り、いつしか打時雨れつつ、鹿の音幽かに音づれて、蟲の恨も絶々なり。とにかくに取集めたる御心細さ、譬へやるべき方もなし。浦傳ひ島傳ひせし時も、有繋かうは無かりし物をと思召すこそ悲しけれ。岩に苔蒸して寂びたる處なれば、住まほしうぞ思召す。露結ぶ庭の萩原霜枯れて、籬の菊の枯れ枯れに、うつろふ色を御覽じても、御身の上とや覺しけむ。

佛の御前へ參らせ給ひて、「天子聖靈成等正覺、一門亡魂頓證菩提」と祈り申させ給ふにつけても、先帝の御面影ひしと御身に添ひて、如何ならむ御世にか思召し忘れさせ給ふべき。さて寂光院の傍に、方丈なる御庵室を結んで、一間をば佛所に定め、一間をば御寢所に飾ひ、晝夜朝夕の御勤、長時不斷の御念佛、懈る事なくて月日を送らせ給ひけり。

かくて神無月中の五日の暮れ方に、庭に散り敷く楢の葉を、物踏み鳴らして聞えければ、女院、「世を厭ふ處に、何者の訪ひ來るやらむ。あれ見よや。忍ぶべき者ならば、急ぎ忍

ばむ。」とて見せらるゝに、小鹿の通るにてぞありける。女院「如何に。」と御尋ねあれば、大納言佐殿涙を抑へて、

大納言佐 平重衡の妻

岩根踏み誰かは訪はむ楢の葉の
そよぐは鹿の渡るなりけり

女院哀に思召し、窻の小障子に此歌を遊ばし留めさせ給ひけり。

かかる御徒然の中にも、思召しなぞらふる事どもは、つらき中にも數多あり。軒に並べる樹をば七重寶樹とかたどり、岩間に積る水をば八功德池と思召す。無常は春の花、風に隨つて散り易く、有涯は秋の月、雲に伴つて隱れ易し。昭陽殿に花を翫びし朝には、風來つて匂を散らし、長秋宮

七重寶樹 七重に並列せる極樂の寶樹

八功德池 極樂淨土にありて八功德を具有する池水

に月を詠めし夕には、雲掩うて光を藏す。昔は玉樓金殿に錦の褥を布き、妙なりし御住居なりしかども、今は柴引結ぶ草の庵、餘所の袂も濕ひけり。

二二 大原行幸 其三

供奉 公卿 殿上人 翠黛の山 なじかは つやつや 十方
花筐

かかりし程に、法皇は、文治二年の春の比、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽ぜまほしう思召されけれども、二月三月の程は、嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峰の白雪消えやらで、谷の氷柱も打解けず。かくて、春過ぎ夏來て、北祭も

法皇 後白河法皇

北祭 賀茂祭

徳大寺 後徳大寺實定
花山院 藤原兼雅
土御門 源通親
補陀洛寺 山城國愛宕郡大原附近
小野皇太后 後冷泉天皇の皇后にて兄の僧靜圓の山房に入つて尼と成れり。其舊跡は愛宕郡小野山附近に在り

過ぎしかぼ、法皇夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉の人々には、徳大寺・花山院・土御門・以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原深養父が補陀洛寺、小野の皇太后宮の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山に懸る白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるゝ。比は卯月二十日餘の事なれば、夏草の茂みが末を分き入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も、思召し知られて哀なり。

西山の麓に、一宇の御堂あり、即ち寂光院是なり。舊う造り成せる泉水木立、由ある樣の處なり。「甍破霧燒不斷香、扉落月挑常住燭。」とも、かやうの處をや申すべき。庭の夏草茂り合ひ、青柳糸を亂りつゝ、池の浮草浪に漂ひ、錦を曝すかと謬たる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの晩櫻、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇是を叡覽あつて、かうぞ思召しつゞけける。

池水に汀の櫻散りしきて
なみの花こそ盛なりけれ

ふりにける岩の絶間より、落ち來る水の音さへ、故び由ある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及びがた

瓢簞屢空
橘直幹の作句にて和漢朗詠集に出づ
顏淵原憲は共に孔子の高弟にて清貧に安んじたる人也

し。

さて、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏・這ひかかり、荵交りの萱草、「瓢簞屢空、草滋顏淵之巷、藜藿深鎖、雨濕原憲之樞。」とも謂ひつべし。杉の葺目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、漏る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いざさ小篠に風噪ぎ、世にたえぬ身の習として、ふきふし繁き竹柱、都の方の言傳は、閒遠に結へるませ垣や、僅に事問ふものとては、嶺に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、是等が音信ならでは、薜の葛、青つゞら、くる人稀なる處なり。

法皇「人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もな

因果經
過去現在因果經の略にて、宋の求那跋陀羅の譯、小乘教に屬し四卷より成る

し。良〻あつて、老い衰へたる尼一人參りたり。「女院は何くへ御幸成りぬるぞ。」と仰せければ、「此上の山へ華摘に入らせ給ひて候ふ。」と申す。「さやうの事に仕へ奉るべき人も無きにや。さこそ世を捨つる御身といひながら、御痛はしうこそ。」と仰せければ、此尼申しけるは、「五戒十善の御果報盡きさせ給ふに依つて、今かかる御目を御覽ずるにこそ候へ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませ給ふべき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因。』と說かれたり。過去未來の因果を兼て悟らせ給ひなば、つやつや御歎あるべからず。昔悉達太子は、十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木の葉を聯ねて膚を隱し、嶺に上つて薪を

採り、谷に下りて水を掬び、難行苦行の功に依つて、遂に成等正覺し給ひき。」とぞ申しける。此尼の有樣を御覽ずれば、身は絹布の分も見えぬ物を結び集めてぞ著たりける。あの有樣にても、かやうの事申す不思議さよと思召して、「抑汝は如何なる者ぞ」。と仰せければ、さめ〴〵と泣いて、暫しは御返事にも及ばず。良〻あつて涙を抑へて、「申すにつけて憚多く候へども、故少納言入道信西が女阿波內侍と申し者にて候ふなり。母は紀伊の二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程も思ひ知られて、今更せむ方なうこそ覺え候へ。とて、袖を顏に押當てて、忍びあへぬ樣、目も當てられず。

來迎の三尊 衆生を淨土に引攝せんが爲に來迎せる阿彌陀如來觀世音菩薩大勢至菩薩をいふ

善導和尙 唐の高僧、淨土敎を大成せり

淨名居士 維摩羅詰

法皇「げにも汝は阿波內侍にこそあんなれ。今更御覽じ忘れける、唯夢とのみこそ思召せ」とて、御涙せきあへさせ給はず。供奉の公卿・殿上人・も「不思議の尼哉と思ひたれば、理にてありけるぞ。」と、各申し合はれけり。

さて、彼方此方を叡覽あれば、庭の千草露滋く、籬に倒れ懸りつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見え分かず。御庵室へ入らせ給ひて障子を引きあけて御覽ずれば、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の糸を懸けられたり。左には普賢の畫像、右には善導和尙並に先帝の御影を懸け、八軸の妙文・九帖の御書・も置かれたり。蘭麝の匂に引替へて、香の烟ぞ立上る。彼淨名居士の方丈

大江定基　長保六年入唐、彼國にて寂す、法名寂昭、圓通大師と號す

の室の中に、三萬二千の床を竝べ、十方の諸佛を請じ給ひけむも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて、所々に押されたり。其中に、大江定基法師が清涼山にして詠じたりけむ、「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。」とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御製と覺しくて、

思ひきや深山の奥に住居して
雲井の月を餘所に見むとは

さて、側を御覽ずれば、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣・紙の御衾・なんど懸けられたり。さしも本朝・漢土の妙なる類數を盡しし綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞ成りにける。法皇涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人・も各見參らせし事なれば、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

去程に上の山より、濃き墨染の衣著たる尼二人、岩のがけちを傳ひつゝ、下り煩ひたる様なりけり。法皇是を御覽じて、「あれは如何なる者ぞ。」と御尋あれば、老尼涙を抑へて、「花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせ給ひたるは、女院に渡らせ給ひ候ふ。爪木に蕨折り具して候ふは、鳥飼中納言維實の女、五條大納言國綱が養子、先帝の御乳母、大納言佐。」と申しもあへず泣きけり。法皇も世にあはれげに思召して御涙せきあへさせ給はず。女院はさこそ世を捨つる

御身といひながら、今かかる御有樣を見え參らせむずらむ恥かしさよ。消えも失せばやと思召せども甲斐ぞなき。宵々毎の閼伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も滋くして、絞りや兼ねさせ給ひけむ。山へも歸らせ給はず、御庵室へも入らせ御坐さず、御涙に咽ばせ給ひ、あきれて立たせ坐したる所に、內侍の尼參りつゝ、花筐をば賜はりけり。（作者未詳——平家物語）

設問　充字及び正誤。

明治三十六年十月の末、東海丸は此日本海をかうしけるに、風激しく、浪あらく、蜜雲空をおほうて、しせきを辯ぜず。あわれや、露船フログレッス號につきあてられて、船體を損じて遂に沈歿せり。船員乘客すべて九十七人の中、六十人は露船のボートにすくはれたりしが、三十七人ははかなくでき死せり。船長久田佐助氏は迎えに來りし露船のボートを退け、しようとして身を船にしばりつけ、つなを引きて高く瀛笛をならしつゝ、船と共に海庭に沈沒せり。嗚呼莊なるかな。

二三　公家一統の政　其一

重祚　公家　宰相　門跡　舌を翻す　鎧直垂　裾金物　草摺長
白篦　節陰　二所藤　白瓦毛　沃懸地

廢帝　光嚴天皇

先帝重祚の後、正慶の年號は、廢帝の改元なればとて、之を棄てられ、もとの元弘にかへさる。其二年の夏の比、天下一時に評定して、賞罰法令悉く公家一統の政に出でしか

群俗云々
帝範下務農篇曰、惠可レ懐也于則殊俗歸レ風若三披レ霞而照二春日一威可レ懼也則中華慴レ軌若三履レ刃而戴二雷霆一

大塔宮
後醍醐帝の第四子尊雲法親王、還俗して護良親王といふ

志貴
大和國生駒郡に在る山、東半腹に毘沙門堂在り

七德云々
帝範下崇文篇の文にて成の字敷に作る。禁レ暴戢レ兵保レ大定レ功安レ民和レ衆豐レ財を七德といふ

九功
尚書大禹謨曰、水火金木土穀、正德、利用、厚生

休明の德
尚書大禹謨曰、戒レ之用レ休、注休美也

ば、群俗風に歸すること、霞を披いて春日照すが若く、中華軌を懼るること、刃を履んで雷霆を戴くが若し。同年の六月三日、大塔宮志貴の毘沙門堂に御座ありと聞えしかば、畿内近國の勢は申すに及ばず、京中遠國の兵までも、人より先にと馳せ參じける間、其勢、頗る、天下の大半を盡しぬらむと、夥し。同十三日に御入洛あるべしと定められたりしが、其事となく延引ありて、諸國の兵を召され、楯を作がせ、鏃を砥がせ、合戰の御用意ありと聞えしかば誰が身の上とは知らねども、京中の武士の心中更に穩ならず。

之に依つて、主上、右大辨宰相清忠を勅使にて、仰せられけるは、「天下已に鎭つて、七德の餘威を偃せ、九功の大化を成すところに、猶干戈を動かし、士卒を集めらるゝの條、其要何事ぞや。次に四海騷亂の程は、敵難を遁れむが爲に、一旦其容を俗體に替へらるゝと雖も、世已に靜謐の上は、急ぎ剃髮染衣の姿に歸し、門跡相承の業を事とし給ふべし」とぞ仰せられける。宮、清忠を御前近く召され、勅答申させ給ひけるは、「今四海一時に定つて、萬民無事の化に誇ること、陛下休明の德に依り、微臣籌策の功に由る。然るに、足利治部大輔高氏、僅に一戰の功を以て、其志を萬人の上に立てむと欲す。今若し其勢微なるに乘じて之を討たずんば、高時法師が惡逆を取つて、高氏が威勢の上に加ふる者なるべし。是の故に、兵を擧げ武を備ふる、全く臣が罪にあらず、

虎賁　勇士の稱、賁奔と音相通ず、猛虎の奔るが如く猛きをいふ

次に剃髪の事、兆前に機を鑑みざる者、定めて舌を翻さむか。今逆徒測らざるに滅びて、天下無事に屬すと雖も、與黨猶身を隱し、隙を窺ひ、時を待たずといふ事あるべからず。此時、上威嚴なくば、下必ず暴慢の心あるべし。されば、文武の二道同じく立つて治るべきは、今の世なり。われ若し剃髪染衣の體に歸して、虎賁猛將の威を捨てば、武に於いて朝家を全うせむ人、誰ぞや。それ、諸佛菩薩利生方便を垂る日、攝受折伏の二門あり。其攝受とは柔和忍辱の貌を作して慈悲を先と爲し、折伏とは大勢忿怒の形を現じて刑罰を宗と爲す。況や、聖明の君、賢佐武備の才を求むる時、或は出塵の輩を俗體に歸し、或は退體の主を帝位に即け奉

賈島浪仙　唐の文宗の頃の人、浪仙は字也

大樹　後漢の光武に仕へた馮異の故事。將軍の異稱

る、和漢其例多し。所謂、賈島浪仙は釋門より出でて朝廷の臣と成り、我朝の天武・孝謙・は法體を替へて重祚の位に登る。抑、われ台嶺の幽溪に栖んで、纔に一門跡を守ると、幕府の上將に居して、遠く一天下を鎭むると、國家の用いづれを吉とせむ。此兩篇速に勅許下さゝ樣に、奏聞を經べし」と仰せられ、則ち清忠をぞ還されける。

清忠卿歸參して、此由を奏聞しければ、主上具に聞し召され、「大樹の位に居して、武備の守を全うせむこと、げにも朝家の爲に人の嘲を忘るゝに似たり。高氏誅罰の事、かの不忠何事ぞや。太平の後、天下の士卒、猶恐懼の心を抱く。若し罪なくして罰を行はば、諸卒豈安堵の思を成さむや。然

れば、大樹の任に於いては、仔細あるべからず、高氏誅罰の事に至つては、其企を止むべし」と聖斷あつて、征夷將軍の宣旨を成さる。

之に依つて、宮の御憤も散じけるにや、六月十七日志貴を御立あつて、八幡に七日御逗留あつて、同二十三日御入洛あり。其行列行粧、天下の壯觀を盡せり。先、一番には赤松入道圓心千餘騎にて前陣を仕る。二番には殿法印良忠七百騎にて打つ。三番には四條少將隆資五百餘騎、四番には中院中將定平八百餘騎にて打たる。其次に、花やかに鎧うたる兵五百人すぐつて、帶刀にて二行に歩ませらる。其次に、宮は赤地の錦の鎧直垂に、緋縅の鎧の裾金物に牡丹の

陰に獅子の戲れて前後左右に追ひ合ひたるを、草摺長に召され、兵庫鎌の丸鞘の太刀に虎の皮の尻鞘かけたるを、太刀懸の半に結うてさげ、白箙に節陰ばかり少し塗つて、鵠の羽を以て矧いだる征矢の、三十六さしたるを、筈高に負ひなし、二所籐の弓の、銀の釖打ちたるを十文字に拳つて、白瓦毛なる馬の、尾髮飽くまで足つて太く逞しきに、沃懸地の鞍置いて、厚總の鞦の唯今染め出でたる如くなるを、芝打長に懸けなし、侍十二人に雙口せさせ、千鳥足を踏ませて、小路を狹しと歩ませらる。後乘には、千種頭中將忠顯朝臣、千餘騎にて供奉せらる。猶も御用心の最中なれば、御心安き兵を以て非常を警めらるべしとて、國々の兵を

兵庫鎌云々　銀の鎌を太刀の帶取にしたる圓鞘の太刀、圓鞘は銀の延金にて柄も鞘も包みたるもの

太刀懸　左の草摺のゆるぎの糸の所を、絲を用ひず革を蝙蝠付にしたるをいふ

芝打長　鞦の裾の長めなること

ば、混物具にて三千餘騎、閑に小路を打たせらる。其後陣には、湯淺權大夫・山本四郎次郎忠行・伊東三郎行高・加藤太郎光直、畿內近國の勢打込に、二十萬七千餘騎、三日支へてぞ打ちたりける。時移り事去つて、よろづ昔に變る世なれども、天台座主忽に將軍の宣旨を蒙り、甲冑を帶し、隨兵を召し具し、御入洛ありし分野は、珍しかりし壯觀なり。

二四　公家一統の政　其二

妙法院後醍醐帝の第

蟄懷を啓く　本所　輕軒香車　靑侍　地頭　奧に媚び竈に求む
准后　卿相雲客　理世安國　論人　供養

其後、妙法院宮は、四國の勢を召し具せられ、讃岐國より

一子、尊良法親王

御上洛あり。萬里小路中納言藤房卿は預人小田民部大輔相具して、常陸國より上洛せらる。春宮大進季房は、配所にて逝りにければ、父宣房卿悅の中の悲、老後の涙袖に滿つ。法勝寺の圓觀上人をば、預人結城上野入道具足し奉り、上洛したりければ、君法體の恙無き事を悅び思召して、軈て結城に本領安堵の綸旨を成し下さる。文觀上人は硫黃島より上洛し、忠圓僧正は越後國より歸洛せらる。總じて、此君笠置へ落ちさせ給ひし刻、解官停任せられし人々、死罪流罪に逢ひし其子孫、此處彼處より召し出され、一時に蟄懷を啓けり。されば、日來武威に誇り本所を無する權門高家の武士共、いつしか諸庭の奉公人と成り、或は輕軒香車

恪勤 扈從雜役に供する小侍、即ち庶士の最も下賤なるもの

の後に走り、或は青侍恪勤の前に跪く。世の盛衰、時の轉變、歎くに叶はぬ習と知りながら、今の如くにて、公家一統の天下とならば、諸國の地頭・御家人・は、皆奴婢雜人の如くにてありぬべし。あはれ、如何なる不思議も出來て、武家四海の權を執る世の中にまた成れかしと、思ふ人のみ多かりけり。

上卿 禁中の公事の時大臣又は大中納言が臨時に務めし奉行をいふ

同じき八月三日より、軍勢恩賞の沙汰あるべしとて、洞院左衞門督實世卿を上卿に定めらる。之に依つて、諸國の軍勢、軍忠の支證を立て、申狀を捧げて、恩賞を望む輩、幾千萬人といふ數を知らず。實に忠ある者は功を憑んで訴はず、忠なき者は奥に媚び竈に求め上聞を掠むる間、數月の奥に媚び云々

論語八佾篇曰、王孫賈問曰、與三其媚二於奥一、寧媚二於竈一、何謂也、子曰、不レ然、獲二罪於天一、無レ所レ祈也。竈者五祀之一、夏所レ祭也

内に、僅に二十餘人の恩賞を沙汰せられたりけれども、事正路にあらずとて、軈て召返されけり。

さらば、上卿を改めよとて、萬里小路中納言藤房卿を上卿に成され、申狀を附け渡さる。藤房之を請取つて、忠否を糺し、淺深を分ち、各〻申し與へむとし給ひける所に、内奏の祕計に依つて、唯今までは朝敵なりつる者も安堵を賜はり、忠なき輩も五箇所十箇所の所領を賜ひける間、藤房諫言を納れかねて、病と稱して奉行を辭せらる。かくて默止すべきにあらずとて、九條民部卿を上卿に定めて、御沙汰ありける間、光經卿、諸大將に其手の忠否を委細尋ね究めて、申し與へむとし給ひける處に、相摸入道の一跡をば、内

裏の供御料所に置かる。舍弟四郎左近大夫入道の跡をば、兵部卿親王へ進せらる。大佛陸奥守の跡をば、准后の御領になさる。此外、相州の一族、關東家風の輩が所領をば、させる事もなきに、郢曲妓女の輩、蹴鞠伎藝の者共、乃至衞府諸司・官女・官僧・まで、一跡二跡を合奏せて、內奏より申し賜はりければ、今は六十六箇國の內には、錐を立つる地も、軍勢に行はるべき闕所は無かりけり。かかりければ、光經卿も、心ばかりは無偏の恩化を申し沙汰せむと欲し給ひけれ共、叶はで年月をぞ送られける。

また、雜訴の爲にとて、郁芳門の左右の脇に、決斷所を作らる。其議定の人數には、才學優長の卿相・雲客・紀傳・明法・外記・官人を三番に分つて、一月に六箇度の沙汰の日をぞ定められける。凡そ事の體、嚴重に見えて堂々たり。されども、是尙理世安國の政にあらざりけり。或は內奏により訴人勅許を蒙れば、決斷所にて論人に理を附けらる。又、決斷所にて本主安堵を賜はれば、內奏により其地を別人の恩賞に行はる。此の如く互に錯亂せし間、所領一所に四五人の給主附いて、國々の動亂更に休む時なし。去んぬる七月の初より、中宮御心煩はせ給ひけるが、八月二日隱れさせ給ふ。是のみならず、十一月三日、春宮薨御成りにけり。是徒事にあらず、亡卒怨靈の所爲なるべしとて、其怨害を止め善所に赴かしめむが爲に、四箇の大寺に仰せて、大藏經五千

外記

大政官の官人にて詔書奏文を勘造し局中の記錄を掌る

春宮 光嚴帝の太子 康仁

四箇大寺 東大寺興福寺 延曆寺園城寺

三百卷を、一日中に書き寫させ、法勝寺にて即ち供養を遂げられけり。（作者未詳――太平記）

設問 讀方及意義。

驀地　藐姑射　尾大掉はず　僻む　兵仗　不躾　風伯雨師　剽輕

者　布袋　沒義道　沒書　沒趣味

二五　菅公の左遷

おとゞ　ざえ　あへなむ　をちかたに　かしこく　まさざまに

いと　いとゞ　あら人神

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ、左大臣の位にて年いと若くておはしき、菅原のおとゞ、右大臣の位にておはしま

す。そのをり、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかり、右大臣御年五十七八にやおはしけむ。共に世の政をせしめ給ひし間、右大臣さえも世にすぐれめでたくおはしまし、御心掟もことの外にかしこくおはしまし、左大臣は御年も若く、才もことの外に劣り給へるにより、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ために宜しからぬ事出できて、昌泰四年正月二十九日太宰權帥になし奉りて、流されたまふ。

このおとゞの子ども數多おはせしに、女君だちは聟ど

りし、男君だち、は皆ほどほどにつけて位どもおはせしを、これも皆方々に流され給ひてかなしきに、稚なくおはしける男君・女君・たち、慕ひ泣きておはしければ、「ちひさきはあへなむ。」と、おほやけも許さしめ給ひしかば、ともにゐて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて。極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣さざりけり。かたがたにいと悲しくおぼしめして、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春な忘れそ

また、亭子の御門に聞えさせたまふ、

亭子の御門　宇多上皇

山崎　山城國乙訓郡に在り往昔中國四國抔に下る人は此處にて船に乘りて難波に下る也

ながれ行くわれは水屑となりぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ

なき事により、かく罪せられ給ふを、からくおぼし歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむやどの梢をゆくゆくも
かくるゝまでにかへりみしはや

又、播磨の國におはしつきて、明石の驛といふ所に御やどりせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らしめ給へる詩、いとかなし。

驛長無驚時變改　一榮一落是春秋

かくて、筑紫におはしまし著きて、あはれに心細くおぼさるゝ夕、をちかたに所々烟たつを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり
なげきよりこそ燃えまさりけれ

また、雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれとび行く雲のかへりくる
かげ見るときぞなほたのまるゝ

さりともと、世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までも
きよきこゝろは月ぞてらさむ

大貳の居所
大宰大貳の官宅也。當時の大貳は參議藤原興範也

九月九日
昌泰四年

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門も、固めておはします。大貳の居所は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、またいと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色　觀音寺唯聽鐘聲

これは、文集白居易「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看」といふ詩にも、まさざまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士どもは申しけれ。

又、かの筑紫にて、九月九日、菊の花を御覽じけるついで

に、まだ京におはしましし時、九月の今宵、内裡にて菊の宴ありしに、このおとゞ作らしめ給へる詩を、みかどかしこく感じたまひて、御衣賜はせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞそのをりおぼしめし出でて、作らせ給ひる、

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく人々感じ申されき。

また、雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわける程のなければや
著てしぬれぎぬひるよしもなき

北野　山城國葛野郡に在り、北野傳記に一夜に幾千本生じたる也と見ゆ

やがて、かしこにて失せ給へり。夜のうちに、この北野に、そこらの松をおほさしめ給ひて、住み給ふをこそは、唯今の北野宮と申して、あら人神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこく崇め奉り給ふめり。

（藤原爲業――大鏡）

設問一　充字。

あいまい　あいさつ　いんじゆん　いつぞや　いへづと　かげろふ　うんちく

設問二　讀方及び意義。

胡散　胡床　憧る　朝餉　訝る　由緒　有職　灰汁　四阿　生憎

國文提要 終

大正五年四月十日印刷
大正五年四月十三日發行

頭書 國文提要奥附
定價 金參拾六錢

著作者 東京市牛込區矢來町三番地 永井一孝

發行兼印刷者 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地 大日本圖書株式會社
右代表者 專務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
郵便振替貯金口座 東京 二一九番

發行所

各府縣下 特約販賣所

不許複製

202
427